

法王庁の避妊法

飯島早苗

この戯曲は篠川達明著『法王庁の避妊法』（文藝春秋刊）を元に創作したものです。

登場人物

荻野久作 産婦人科医

古井半三郎 久作の助手

高見詠一 外科医

野村佐吉 ハナの夫

荻野とめ 久作の妻

野村ハナ 患者

津島より子 新任の看護婦

酒井キヨ 患者

場面

大正の中頃

新潟、竹山病院、産婦人科

一幕

一場 春、朝

二場 翌年の夏、昼休み前

三場 秋、夕暮れから夜

二幕

一場 春、夕方

二場 夏、昼休み前

三場 秋、夜

四場 冬、夕方

第一幕

第一場 春

大正の中頃。

主人公、荻野久作が勤務している、新潟市内の竹山病院産婦人科。

上手側が診察室、扉を隔てて下手側に待合室がある。

診察室の上手の端に、治療室に続く扉。奥の壁には、庭が見える窓と、庭に出られる扉がある。

待合室の下手端には廊下に続く扉。

朝、診療開始前。

病院の中はまだ静まり返っている。窓に掛かったカーテンも閉まったままである。

診察室に置かれた机で、産婦人科医長である荻野久作が研究資料やノートと格

闘している。

昨夜から徹夜で研究をしていたようである。しかし、久作はすでに朝になって
いることに気づいていない。

待合室の扉から、古井半三郎が入ってくる。

半三郎は久作の助手である、きっちりと白衣を着て、いかにも実直そうな感じ。
新潟医大の研究室にいたのだが、久作の助手もしている。敬虔なクリスチャン
でもある。

半三郎は、診療が始まる前に、尊敬する荻野先生の診察室を掃除でもしておこ
うと考えて、朝早くやって来たのである。

桜の花の枝をさした花瓶を持っている。

待合室のカーテンを開けていき、診察室に入る。

と、そこに机の前に座る久作がいるのを見て驚く。

半三郎——荻野先生——お早いですねえ。ほら、桜です。家の庭に咲きました。先生はお

花見するお暇もないですから、せめてと思ひまして。

久作（資料から目を離さずに）ああ、古井くん、まだいたんですか。今日はもう帰って
結構ですよ。ご苦労様でした。

半三郎 先生——あの——今来たところなんです。

久作 (どういう意味か判らない) —— いつの間に帰って、いつの間に来たんですか。

半三郎 昨日きのうの夜に帰って、今来たところなんです。

久作 すると今は、一夜明けて翌日ということなのかな？

半三郎 (どういう意味か判らないが、とりあえず挨拶をする) おはようございます。
久作 (つられて) おはようございます。

半三郎、診察室のカーテンを開ける。部屋の中に朝日が差し込んでくる。

半三郎、ようやく気づいて、

半三郎 ひよっとして、また研究で徹夜ですか？

久作 —— 夜が明けていたとは気づきませんでした。

半三郎 (ひどく感服して) 凄いです。さすが先生です。稀に見る超人的な体力と集中力です。

久作 いやいや。

半三郎 僕は先生のお手伝いできて、これ以上の幸せはありません。これも神の思し召しです。僕は一生を先生の研究のお手伝いに捧げたいと考えています。

久作 古井くんには古井くんの研究があるでしょう。それに一生を捧げて下さい。

半三郎 教授のお仕着せの研究なんて、つまらないものです。それより、荻野先生のお手伝

いをする方がどれほど価値があるか——これこそ、神が僕に与え給うた仕事なんです。

久作 古井くん、たまには大学の研究室の方へ——

半三郎 それより先生、もしや昨夜ゆうべから何も召し上がっておられないんじゃないですか？

久作 ——言われてみれば——

半三郎 じゃあ、僕ちよつと賄まかないさんのところに行つて、にぎり飯こしらでも拵こしらえてもらつて来ま

す。まだ、診療の時間までには間がありますから。

久作 古井くん——

半三郎、勇んで出て行きかける。

ちようどその時、臨月らしき大きなお腹の酒井キヨ、風呂敷包みを持って、診

察室にヨチヨチ入つてくる。

粗末な身なりだが、陽気で働き者のおかみさんである。

キヨ おはようございます。

半三郎 おキヨさん。

キヨ ——あ、あたたたたた。

久作 陣痛が、始まりましたか?!

キヨ (笑う。二人をちよつとおどかしてみただけなのである) ちよつとずつだ。さつき

「しるし」があつたもんだすけ、こらもうじきガキが出てくるんじゃないかねえかと思つて、歩いて行けるうちに來たんですて。

半三郎 じゃあ、あちらへ (治療室の方を示す)

キヨ そんげんことはどうでもいいんですて。

半三郎 どうでもよくないですよ。

キヨ それより先生、おめでどうございます。

久作 おめでどうなのは、おキヨさんでしょう。

何を言つてるだ。先生、縁談がおりになるそうじゃねえですか。

半三郎 え、え、縁談?! 本当なんですか、先生?!

キヨ 本当だ。

久作 縁談というか何というか——

半三郎 おめでどうございます。

キヨ おめでどうございます。

久作 おめでたいというか何というか—— (戸惑っている)

半三郎 おめでたいですよ。先生が結婚ですかあ——先生、独り身の僕が申し上げるのも

なんです、結婚とは、死が二人を分かつまで、愛しい慈しみあい、ですね——

久作 ふ、古井くん、私が身を固めようと思つたのは、産婦人科の研究者にとつて、妻と

キヨ 亭主が賄いさんのところに味噌を届けにきたら、看護婦さんたちの噂になつてゐるつてのう。

久作 わ、わ、私は、その――

キヨ 知らなかったとは、知らなかったですて。

久作 私は――お会いするとか、お見合いでするとか、お引き合わせするとか――会いません。私は、断固として会いません。

半三郎

でも先生、ご結婚なさるんですから、いつかはお会いしなけりや。

久作 いつかは会います。でも、それが今日である必要はない！

キヨ 先生、落ちついてくんないせえ。

久作 どうすればいいんでしょう。

キヨ おなごの心をぐつと擱めばいいんですて。

久作 そういうことじゃないんです。――私は女性を見る目がありません。

キヨ おなごの観音様は、毎日診察してゐるのにのう。

久作 そういうことではありません。

キヨ 判つてますて。

久作 その方が私に相応しいかどうかなど、まったく判らないでしょう。そして、家に帰ってから一晩中悩むでしょう。貴重な研究の時間が目減りしてしまう。

半三郎

先生の研究の時間が？ それは一大事です。

久作 一大事なんです。それならいつそのこと、祝言のその日まで会わないことにしよう。

それなら悩まずにすむ、そう思っていたのに——

キヨ そんなら、先生、私がおなごの見方をご指南しますて。

久作 ——そ、そうですか。

キヨ まず、先生、おなごを見る時は、腰を見なせえ。おなごは腰が命ですすけの。腰の
しっかりしたおなごは働きもんだし、丈夫だし。

久作 ——そ、そうですか——腰ですか——

キヨ おらを見てみなせえ。

久作 (見てみて) うーむ (納得いかない)

キヨ それなら、おらと古井先生も、見極めてさしあげますて。

半三郎 ええ、先生、いたしますとも!

久作 (二人の勢いに押されて) そうですか、えーと——じゃあ、宜しく願います——
キヨ 任せときなせえ。

その時、待合室には野村ハナが、そおつと入って来ている。

質素な身なりだが、初々しく、可憐で、とても可愛らしい女性である。

辺りを見回して、不安気な様子。

診察室を恐る恐る覗き込む。

ハナ あのうち——

久作 はっ、はいっ!!

ハナ お、おはようございます——

半三郎・キヨ おはようございます。

久作、ハナを見て直立不動状態になる。

キヨは「このひとがお嫁さんだ!」と思つて、期待に輝く目で見つめている。
半三郎は、ハナが可愛らしいので見とれてる。

ハナ あの(三人とも自分を見つめているので、驚きつつ)朝早うから、申し訳ねえこと

でございますども……

久作 ——(緊張している)

キヨ 先生、しっかりしなせえ!(久作の背中をどつく)

久作 (ハナに)いいえっ、とんでもありませんことでございます?!

キヨ あ、こんげなところですがども、お掛けなさつて。

ハナ はい、ありがとうございますです。

キヨ、ハナを座らせるのかこつけて、ハナの腰のあたりを触る。
戸惑う、ハナ。

キヨは、にっこり微笑みを返して、久作に近寄る。

キヨ
(小声で) 先生、腰は上等ですて。

久作

半三郎
じゃあ、先生、僕たちは席を外します。

久作
え、そうですか(不安である)

半三郎
はい、まだ診療時間までしばらくありますので、ごゆっくり。

半三郎、出ていこうとする

キヨは、それを見送って自分はここに居すわるつもり。

半三郎
(キヨに気づいて) おキヨさん。

半三郎、キヨを連れて出ていこうとする。

久作、不安げに二人の方を見る。

半三郎とキヨは、ハナには、見えないように、久作に合図を送る。

ハナの点数をつける二人。

キヨは小さく丸を出す。

半三郎はハナをもう一度見て、必要以上に大きな丸を作ってみせる。

まだ、不安を隠しきれない久作。

キヨ、頑張れと合図。そして、半三郎に待合室に連れ出される。

半三郎 可愛いお嫁さんですよね。

キヨ そうだども、荻野先生には合わねえように見えるねえ。

半三郎 僕は素敵だと思うなあ。

キヨ 惚れるでねえて。

半三郎 ——そ、そんな——（凶星である）

診察室の久作とハナ、緊張している。
間。

久作 ——お、荻野久作と申します。

ハナ 野村ハナです。

久作 明治十五年三月二十五日生まれ、東京帝国大学を卒業いたしております。私は荻野

家に養子に参りまして、現在は養父母と共に暮らしています。

ハナ —— はい。

久作 あなたのような方に私の所にお嫁に来て頂ければ、養父母も喜ぶでしょう。無論、

私もありますが——

ハナ お嫁に？ 私がですか？ 先生様のですか？

久作 —— あ、あの——もし、あなたが進まないようでしたら、断って頂いて結構ですから。

ハナ —— あのう、私、先生様のところにゃお嫁に行けねえかと思うんです——申し訳ねえことなんですとも。

久作 あ、そうですか。残念ではありますが、ご縁がなかったということでしょう。

ハナ はあ、私、へえ（もう）嫁いでおりますもんで。

久作 は？

ハナ 私、去年の暮れにお父ちゃんのとこさ嫁い^とで参りまして、はい。

久作 ご結婚——されている——すると、あなたは——もしや、患者さんですか？

ハナ いえ、わりいとはありませんですども、先生様に聞きてえことがあって。

久作 あ、ああそうですか——

ハナ すみません。どうもすみませんです。

久作 いや、謝ることはありません、勘違いしてしまったのは、私の方です。

久作、慌てて待合室の扉を開け、半三郎を呼ぶ。

久作　ふ、古井くくん。

キヨ、しゃしゃりでて、診察室を覗く。

半三郎、その後ろから覗き込む形。

キヨ　先生、何か？

久作　いや、あの、間違いだったのです。

キヨ・半三郎　へ？

久作　患者さんだったんです。

半三郎　患者さんなんですか。

ハナ　——すみませんです。

久作　だから、古井くん、お願いします。

半三郎　でも、まだ診療時間じゃ——（ありません）

久作　いいからいいから。

キヨ　患者さんの腰を触っちゃったじゃねえの。

キヨは、ぶつぶつ言いながら、待合室へ戻る。

半三郎はハナを患者用の椅子に座らせる。

久作、気まづく咳払いして、医者 of 気持ちになろうとする。

久作 えーと——どうなさいました？

ハナ はい——あのう——

久作 はい。

ハナ あのう——

半三郎 (できるだけ優しい声で) 大丈夫ですよ。ここは病院だすけ、どんなことでも恥

ずかしがらずに、先生にお話しして下さい。

ハナ ——はい、あの、私——去年の秋にお嫁に來まして——

久作 結婚して半年ちよつとですね。

ハナ それで、あの——お義母^かさんや、お義父^とさんが、「孫の顔が見てえ」と言つてま

して。お父^とちゃんも、「早く赤ん坊、拵^{こさ}えてくれ」つて言つてますし、それで私も、

拵^{こさ}えなきやいけねえなと思ひまして。——それで、あの——先生様、赤ん坊つてい

うのは、そもそも、どうやって拵^{こさ}えるもんなんでしょうか。

久作 え？

ハナ 赤ん坊の榨こきえ方ですいいね。先生様。

久作 —— えー、夫婦というものは——こ、媾こうごう合を致しますね。

ハナ コーゴー、ですか。

久作 はい、媾合、あるいは、性交、と言いますか。

ハナ あー、そうですか。コーゴーをすると赤ん坊が榨こきえられるがですか。道理で授から

んかったわけですか。コーゴーをしんけりやいけませんね。

久作 —— なさったことがないわけですか？

ハナ したことはねえです。先生様、コーゴーっていうのは、どうやってするもんなんぞ
ごぞいましょうかの。

久作 —— どうすると言われても、あればかりは、人それぞれといいますが——一般的に
は、その——夫婦が一つの寢床で、ですね。仲良くするとうか——えー、つまり
まず両人が着衣を脱ぎ捨ててですね——

ハナ あ。

久作 何ですか？

ハナ 先生様、もしかすつとコーゴーというのは、夫婦の、その、夜の、あのことでしょ
うかの！

久作 そうです！ 夜のそのことです！

ハナ あのその、それらば、知ってますです！ それらば、しよつちゅう！

久作 あ、そうですか。それは良かった。そうですか。しよつちゆうですか。それなら、

いずれできるでしょう。

ハナ あの、でも先生様、お父ちゃんとの姉様あねは、嫁いで三月みつきで悪阻つわりがあつたそうですし、分家のお嫁さんも、私わたしより後にお嫁に来たがんに、もう身ごもつたそうですし、お姑さんたちに色々言われて、辛い立場にいるというわけですか。

久作 いいえ、そんげんことではないがです。お義父とさんもお義母かさんも、楽しみにしてる

ハナ がです。「ハナと佐吉の子なら、おとこつこなら元氣な子だろうし、おんなつこなら器量良しに違いねえ」なんて言ってくれまして——ほんに良うしてくれますから、そのご恩にも報わねばいけねえと思ひまして、ちよつとでも早く赤ん坊が授かりたいがです。

久作 なるほど、いいお嫁さんなんですなえ。

半三郎 (ハナに見とれながら) そうですね。

ハナ いえの、そんげなこと——それで、お父とちゃんと色々考えたがです。子宝の湯には

もう入へりに行きました。それに、スルメや唐がらしは食べねえようにしております。

(至極真面目に) 先生様、聞いた話によると、床へに入る時めえに、私の方が先に入へっていると、子ができるそうで。せいから、床へに入る前めえに水を飲まねえようにすると身ごもるとか。あと、月夜の晩に戸を開けて寝るといいとも、枕たつみを翼たつみの方角に向けると子ができるとも聞きました。先生様、どれが一番宜しいでござえましようかの。

久作 —— えーと、ですな。

ハナ あ、あとそいから、布団に入る^へ時には、決してお寺の鐘は聞かぬように耳をふさいでます。それだけは、ちゃんと守ってますすけ、ご心配下さらぬえようお願いします。

久作 布団に入る時、鐘を聞くと？

ハナ 身ごもらねんですよ、先生様。お父^とちゃんに話したら、これは病院の先生様に伺うのがいいだろって、知恵出してくれて。先生様、どれが一番良い方法でしょうかの。それは、どれも関係ありませんよ。

ハナ —— カンケイない、ですか？

久作 どれも意味はありません。

ハナ やっぱり、道理できかねえと思いました。じゃあ、先生様、正しい方策をお授け下さいまし。

久作 今までおやりになつていいる方法で正しいんですよ。他にしなければならぬことはありません。

ハナ 私たちの方策は正しいがですか。

久作 はい。安心して下さい。

ハナ はあ（納得していない）

久作 それからおハナさん、月のものはきちんとありますか。

ハナ (ふいをつかれて) え?

久作 ありませんか?

ハナ —— 申し上げられません。

久作 おハナさん?

ハナ いくら、先生様であろうと、それはおなごの内緒事ですて、男の方には申し上げられません。

久作 おハナさん、月のものがなぜあるかご存じですか?

ハナ それは——それが止まると、子が授かったしるしで——

久作 そうです。女性の体にある卵巣は、ほぼ月に一度、排卵します、卵子が出るわけです。その卵子が受精して受精卵になります。これがやがて子供になるのです。

ハナ ——はい。

久作 受精卵を受け入れて育てるために、子宮内膜というのができます。受精卵の寝床みたいなものです。しかし、排卵があっても必ず受精するとは限りません。排卵しても受精しなければ、卵子は体の外に排出されます。すると受精卵の寝床になる筈だった子宮内膜も必要がなくなつて体の外に排出されるんです。それが月経です。

ハナ ——とにかく大切なことなんです。判りますか?

久作 そうです。で、月のものはきちんとしていますか?

ハナ (よく考えて) —— はい、ありますです。

久作 なるほど。排卵はほほひとつき一月に一度、一年にしても十二回ほどしかないんです。そして、その卵子が受精できるのも、せいぜい二、三日ではないかと考えられています。ですから——

ハナ 先生様、その二、三日っていうのはいつでござえましようか。今月で言えば、何日になりますですか。

久作 うーん。

ハナ 先生様、けちけちしねで、どうか教えてくんなんしょ。

久作 ——それが、判らないのです。

ハナ ——先生様にもですか？

久作 そうなんです。女性の排卵がいつ起こるのか、それを知っている人は、今世界に一人もいないんです。

ハナ 東京にもいねえんですか。

久作 無論そうです。産婦人科学界における最大の謎なんです。

ハナ ——謎なんですか(がっかり)

半三郎 しかしですね、おハナさん、今、荻野先生はそのことを研究していらっしやるんです。——つまり、その謎を解きあかす学問をしてらっしやるわけです。

ハナ その謎を先生様が解かれるんですか！

久作 謎が解けるまでの道のりはまだまだ遠いんですが――

ハナ 先生様、どうか、どうか頑張ってくださいまし。

久作 ありがとうございます。でも、おハナさんは結婚してまだ半年なんですから、焦ることはありません。今まで通り、お父ちゃんと――その――仲良くしていれば、きっと授かるでしょう。

ハナ (元氣よく) はい。もっともっと仲良くしますよ。

久作 …… (伝わっていない気がするが、諦めて) ご心配になることはないと思いますよ。はい――でも、先生、一応月夜の晩には、戸を開けて寝た方が宜しいがですよね？

春んくなりましたすけ「開けていても寒さむうのうなつた。こいからは毎晩月夜でも平気だ」って、お父とちゃんと言ってたがです。

久作 ――開けなくても、結構ですよ。

ハナ そうなんですか。色々、ありがとうございます。(出ていきかけて)――あ、あの、先生、枕の方角は――

久作 どっちでも、かまいません。

ハナ 判りました。失礼いたします。

ハナ、一礼して出ていく。

待合室の大きなお腹のキヨを見て、

ハナ　いつ、お生まれになるんですね？

キヨ　今日中にはね。

ハナ　そうですか。おめでとうございます。

キヨ　どうも。

ハナ、キヨを羨ましそうに見ながら出ていく。

キヨ、診察室に戻っていく。

キヨ　先生、あの人じゃなかったねえ。

久作　はい。恥をかいてしまいました。

半三郎　残念です。いい方だと思っただんですが。

キヨ　早く来ないかねえ、お嫁さん。（廊下の方を見ようとした時）あ——あたたたた。

半三郎　おキヨさん！

キヨ　——治りました。

久作　無理しないで下さい。

キヨ　おらのガキのことより、今は先生のお嫁さんですて。

そこへ、津島より子、診察室に入って来る。

ハイカラな洋装の「新しい女性」といった感じ。美人であるが気は強そう。

より子

失礼いたしますわ。荻野先生はいらっしゃいました？

一同、より子を見る。

キヨと半三郎、当然、浮足だつ。

久作、それを止めて、

久作

私が荻野ですが——あの、患者さんでしょうか。

より子

いいえ、違いますわ。診療中でいらっしゃいますの？

キヨ

いえいえ、違うんです。さ、どうぞどうぞ。

キヨ、椅子をすすめる。

久作、もう緊張している。

より子

(キヨに) まあ、なんてことをなさいますの！

キヨ

？

より子 お座りになって。(キヨを椅子に座らせ、久作と半三郎に) こんな体のご婦人にこんな

な過酷な労働を強いるなんて、なんてことなんでしょう！

キヨ おら、ただ、椅子を――

より子 何も仰らないで。(久作に) ここは産婦人科ではないんですか？ 婦人のためのお

医者様なのではないんですか？

久作 そ、そうです。

キヨ 先生には、ちゃんとやって頂いてます。今度のお産は悪阻もひどくて、入院した

だなんだで、随分先生にもご心配をお掛けしましたども、先生のおかげでここまで

これたんですすけ。

より子 当たり前のことですわ。

キヨ 七人目の子なんですすけ。その辺にころがってたって産まれます。うちの犬のシロ

の方がよっぽどか弱いってなもんだ。

より子 そんな、ご自分を卑下するような言い方をなさってはいけません。でなければ、婦

人の地位の向上など望めませんもの。

キヨ 婦人なんてそんな立派なしろもんじゃありませんし。

より子 (一人、決意している)――だめだわ。婦人自身の意識の改革から始めなければ。

うちの亭主なんか聞いたたら「俺はフジンなんてものにはお目に掛かったことねえぞ」って、大笑いだわ。

半三郎、大笑い。

より子、半三郎を睨みつける。

半三郎、睨まれて笑い止む。

より子

それより何より、男性の意識を叩き直すことから始めねば。

キヨ

(半三郎に) どうしちまったがかね。このお嬢さんはよお。

より子

荻野先生。

久作

——はい。

より子

私、先生ときちんとお話ししなくてはいけないと思いますの。

半三郎

(どうしたらいいかと困っていたが) そうです。それがいいですね。

キヨ

そうだね。とりあえずそうかもしれないね。

半三郎

じゃあ、僕たちは——

より子

(キヨに) いけませんわ。動いたりなさっては。

キヨ

いえいえ、まだまだ大丈夫ですすけ。

半三郎

おキヨさんには、僕がついてますから。

キヨ

じゃ、ごゆっくり。

半三郎とキヨ、そそくさと出ていこうとする。

出ていく時、久作に合図する。

二人とも、久作には気の毒に思いつつ、バツを出して見せる。

待合室に出てきたキヨと半三郎、

キヨ

なんだね。あの気取りなすったお嬢さんはよお。

半三郎
新しい女性とか、そういうんじゃないでしょうかね。先生もお断りになった方がいいかもしれませんよね。

より子は、診察室のあちこちを点検している。

久作、どうしたらいいかと困惑しつつ、

久作

荻野久作です。ここ竹山病院の産婦人科医長をしております。

より子

申し遅れました。津島より子と申します。

久作

——えーと——

より子

原始、女性は正に太陽であった。真正の人であった——ご存じでしょうか、先生。

久作

——さて——

より子

嘆かわしいことですわ。婦人のための医師である先生がこの言葉をご存じないなん

て。

久作 すみません。

より子 まず、私の考えを聞いて頂きたいと思います。婦人は今、虐げられています。本来、人間として、もっと自由に幸せになる権利を持っている筈なのにです。

久作 はい。

より子 くだいようですけれども、婦人のための産婦人科なのですから、先生にもそのことをきちんとお考え頂きたいと思っておりますの。

久作 判りました。ただ、私と結婚して下さるとしたら――

より子 は？

久作 いや、私も婦人の地位は向上されるべきだと思っています。しかし、もし、あなたが私と結婚して下さるとしたら、私の両親と――

より子 結婚ですって？ 誰と誰が結婚するっておっしゃるんですか？

久作 あなたと私がですが――

より子 先生、冗談にもほどがありますわ!!

久作 ――冗談？

より子 私、結婚なんかするつもりはありません！ 女性に対しての悪質ないやがらせと言っても過言ではありませんわ！ そんな下品な冗談で私を辱めようとなさるなんて、先生には失望いたしましたわ。失礼いたします！

より子、足音も高らかに出ていこうとする。

久作

ちよ、ちよっと待って下さい！

久作、より子を止めようとするが、間に合わない。

待合室を通り過ぎようとするより子。

半三郎とキヨ、何が起こったのか判らない。

久作、慌てて、

久作

古井くん、彼女を止めて下さい！

半三郎

え？ え？

キヨ、すばやく行動する。

より子の前に立ちふさがると、お腹を押さえて苦しんで見せる。

キヨ

あたたたたた！

より子、痛がるキヨに気づいて立ち止まり、キヨのそばへ。

キヨ、痛がったまま、診察室に入っていく、より子を診察室までまんまと連れ戻す。

より子 どうなさいまして？ 生まれてしまいましたの？

キヨ —— 治りました。どうしなされたがですか？ いきなり夫婦喧嘩なんていけねえですよ。

半三郎 そうです。結婚もしてないのに、夫婦喧嘩はいけません。

より子 夫婦喧嘩ですって?!

久作 —— おキヨさん、もしかするとまた間違えてしまったのかもしれない。

半三郎 え？

久作 津島より子さんと仰いましたね。

より子 はい。

久作 失礼ですが、患者さんではないとすると、あなたは一体どなたなんですか。

より子 は？

久作 いえ、無礼な質問だということは重々承知しておるんですが。

より子 私は、今日からこちらに勤務するナースですわ。

キヨ —— ナス？

半三郎 つまり、看護婦さんですか。

より子 無論、そうですわ。

キヨ 看護婦さん。

久作 —— そうですした。今日から新任の方がいらつしやると、昨日婦長に言われていたのをすっかり失念してしまいました。

キヨ 先生へ。

より子 あの――

久作 人違いをしてしまいました。産婦人科医長の荻野です。これから、宜しく願います。

より子 —— はあ。

久作 (半三郎を紹介する) 助手の古井くんです。新潟医大の方から、来てくれています。

より子 宜しく願います。

半三郎 —— こちらこそ。

久作 古井くん、彼女を詰め所の方へ。

半三郎 はい。

より子 いいえ、一人で行けますわ。大丈夫です。

半三郎 あちらです(廊下の方を示す)

より子、出ていく。

そこへ、廊下からの扉を開けて、とめが待合室に入ってくる。

派手な振袖を着て、思いつきりめかし込んでいる。少し背が高過ぎるなど、当時の女性としては少々難があるところもあるが、のびのび育ったお嬢さんという感じで、健康的な魅力がある。

とめ、より子に会釈する。

より子も会釈を返して、廊下に出ていく。

キヨ

看護婦さんだったのかい。

半三郎

ナースだとすると、これから毎日――

キヨ

(同情して) 大変だねえ。お嫁さんも、早く来てくれねえと、ガキの方が先に出て

きちまうよ。あ――あたたたた!

半三郎

おキヨさん!

久作

ほんとは出てきちまいましたか?

キヨ

あたたたた!

診察室であたふたしている三人。

とめ、気を落ちつけて、診察室をそつと覗く。

バタバタしてる三人がいる。

とめ、待合室で待っていることにする。

久作 大きく息を吸って、はい、吐いて。

キヨ —— 引っ込みました。お嫁さんを見るまでは産むに産めねえですて。

半三郎 早く来てくれないと、診療が始まってしまいますよ。

久作 —— やっぱり、私なんかの所へお嫁に来るのは嫌になったのかもしれないね

(ちよっと気落ちしている)

半三郎 (励まそうと) そんなことはありませんよ。

キヨ だって、ほら、手が空いてる時に来ると言うんだすけ、朝とは限らねえじゃねえかね。

久作 いいんです。浮ついた気持ちを捨てて、診療と研究に勤しめという天の声なのかもしれない。

半三郎 天の声—— (思わず祈ってしまう)

キヨ そんな。先生にぴったりのお嫁さんがきつといらっしやいますて。(半三郎に) のう。はい。

久作

より子、看護婦の制服に着替えて待合室に入ってくる。

再び、より子にお辞儀をするとめ。

より子、診察室に入って、

より子

荻野先生、先程から患者さんが見えられてますけど。

久作

——— そうですね。（時計を見て）では、診療を始めましょうか。

キヨ

先生、きつと夕方にみえるんですて。

久作

そのことはもう忘れましょう。

キヨ

じゃあ、私はあっちにいますんで。

久作

大丈夫ですか？

キヨ

はいはい。生まれる時には、申しますんで。

キヨ、待合室に出てくる。

とめを見る。

とめ、キヨにもお辞儀をする。

キヨ、「この人がお嫁さんなんじゃないかしら」と思う。

より子、出てきて、とめに、

より子

どうぞこちらへ。

とめ

は、はい。

とめ、診察室に入っていく。

キヨ、「この人がお嫁さんなんじゃないかしら」と思っているもんだから、診察室を覗く。

とめ

失礼いたします。

久作

どうぞ。

久作、とめを見る。

久作

久作、一目惚れしてしまう。

とめ、緊張してお辞儀をする。

見つめ合う二人。

間。

より子 荻野先生？

久作 あ——失礼しました。

とめ は——はい。

久作 どうなさいました？

とめ はあ——

久作 どこかお悪いんですか？

とめ いいえ。悪いところは特に。いたって達者に暮らしております。

久作 ——？

とめ 私、犬塚とめと申します。あの、竹山院長先生に荻野先生の所にご挨拶に伺うようにと言われました、朝早くならば、お手隙だと伺いましたので。

久作 ——じゃあ、あの、あなたが——

とめ あの——不束者ふつつかものでございますが——どうか宜しく願います！

久作 (どぎまぎして) こ、こちらこそ、宜しく願います。

半三郎 先生、この方が。

キヨ (診察室に入ってきてしまっている) やつぱり、そうだからね。

久作 ——そのようです(すごく嬉しい)

半三郎 あ、じゃあ、私たちは。

半三郎、より子を引っ張って行こうとする。
より子、その手を振り払って、

より子

何なんですか、失礼な方ですわねっ！

キヨ

いいから来なせって。

キヨ、より子を部屋の外へ出す。

出ていく時、キヨと半三郎、合図を送ろうとする。

が、久作はとめのことしか頭の中にない。

キヨ

(久作にこちらを向かせようと) 先生。

と、とめも一緒にキヨたちの方を向いてしまうものだから、

キヨ

きれいなお嫁様だのう。

照れるとめと久作。

その隙に、キヨ、久作だけを振り向かせようと、

キヨ
先生！

久作、二人の方を向く。

キヨは、大丸。半三郎はちよつと考えて三角を出す。

二人は出ていく。

待合室に出ていったキヨと半三郎、

キヨ
(半三郎に) なんで三角なんだい。

半三郎
僕はやっぱり最初の方が――

キヨ
あれは患者さんだ。それに吉井先生のお嫁さんじゃねえんだすけ。

半三郎
判つてますよ。

より子
なんで私たちが出ていかなきゃならないんでしょうか。

キヨ
野暮だねえ。二人きりにしてやらんば。

より子
は？

より子に事情を説明するキヨ。

一方、診察室で二人きりの久作ととめ。

久作、何か話をしなければと思うが、何を話していいのやら判らない。
間。

久作 あの一

とめ 一はい。

久作 えーと、私、昨日はですね。骨盤腹膜炎の手術をいたしました。

とめ はあ、それはご苦労様でございました。

久作 あの一、骨盤腹膜炎というのはですね、腹膜炎の炎症が骨盤の中の卵巣や子宮に及んだものでして、症状はですね、白血球の増加、血沈の亢進なども見られましたですね一

とめ はあ。

久作 私、一体、何を話してるんでしょう？

とめ あの一、骨盤腹膜炎のお話では。

久作 そうですね。そうなんです。しかし、骨盤腹膜炎の話をしていても仕方ありませんよね。

とめ いえ、あの大変興味深うございますね。

久作 こういう場合、何を話したらいいんでしょうか。

とめ —あの、荻野先生。

久作 はい。

とめ もしも、お氣が進まないのでしたら、お断り頂いても結構でございますので。

久作 どうしてでしょう。何かこの縁談に不都合なことでもあるんですか？

とめ —実は私、背が——背が高うございますいね。

久作 そのようですが、それがどうかしましたか。

とめ あの——実を申しますと、私、前にも縁談がありまして、その方は、私より、背の無い方で、女に背はいらないと——

久作 そんなことですか。それなら、私だって（自分の欠点を探して）妙な顔だとよく言われます。

とめ いえ、とてもご立派なお顔だちです。

久作 いやいや、秦の始皇帝だの、逆さにしても同じ顔だの、顎が床につきそうだの。

色々と言われます（あえて欠点を力説する）

とめ （負けずに力説）私など、ウドの大木とか、浅草の十二階とか。

久作 浅草の十二階ですか。そりゃあ、ハイカラだ。

とめ 私、見たことはないんですども。

久作 じゃあ、一度、一緒に行きましよう。

とめ はい。

——と、とめ、それが自分と結婚してくれることなのだという事に気づいて、

とめ
——本当ですか？

久作
——はい。

とめ
——ありがとうございます。浅草の十二階ですが、末永く宜しくお願いいたします。

久作
こちらこそ、宜しく願います、

とめ
はい。

二人、ニコニコと見つめ合っている。

その時、待合室ではキヨが急に陣痛を訴える。

キヨ
あゝ、あたたたたた。

半三郎
おキヨさん？!

キヨ
あたたたたた——こら本格的にきたかもしんねえ。

より子
何ですって?!

より子、診察室の久作に知らせようとする。

キヨ、慌てて止める。

キヨ 治りました。大丈夫。先生を二人きりにしてさしあげんば。

より子 何を言ってるんです。おキヨさんの体の方が大切です。(持っていた教科書を開いて読む) 出産第一期、開口期、子宮収縮は七分おきから十五分おき――

半三郎 何してるんです？

より子 決まってるじゃないですか。分娩に備えているんです！

キヨ じゃあ、おめえさまが読みおわるまで我慢します。

より子 恐縮です。

診察室には、もう話すことが思いつかない二人。
間。

とめ ――じゃあ、私は失礼いたしますので。

久作 ――はい。是非、また。

とめ ――はい。

とめ、立ち上がる。

久作も立ち上がり、扉まで見送る。

その時、久作、重大なことを言い忘れていたのに気づく。

久作 (大声で) あ！

とめ (驚いて) 何でしょう。

久作 —— 実はお願いしたいことがあるんです。

とめ はい。

久作 大切なお願いなんです。あなたにしか頼めないんです。

とめ はい、私にできることでしたら。

久作 (目を輝かせて) 結婚したら、あなたの毎月の月経を記録して欲しいんです。
は？

久作 月経です。毎月の月経。ありますよね？ ないんですか？

とめ (消え入りそうな声で) —— いえ—— あります。

久作 それを、カレンダーに記録して欲しいんです。

とめ —— あの、なぜですか？

久作 私は博士号を取ろうと考えています。それには、研究論文を書かねばならないんです。私は婦人の排卵がいつあるのかを研究しています。

とめ はあ——

久作

夫婦というのは、媾合をします。媾合をすれば子供ができます。しかし、媾合をしたからといって、いつでも子供ができるとは限らない。卵子がなくては受胎できない。では、その卵子は一体いつできるのか！

とめ

——判りません。

久作

それはまだ誰にも判らないんです。それを突き止めたいんです。それには、月経は重要な手掛かりです。

とめ

はい。

とめ、月経だの媾合だのと連呼され気が遠くなっている。

が、久作は興奮しきっていて気づかず、机に戻って、引出しからカレンダーを取り出す。

久作

ですから、このカレンダーに月経の記録をつけて頂きたいんです。——あ、まあお座りになって（椅子をすすめる）月経の日には、赤鉛筆で丸印をつけて頂きたい。

とめ

——はあ。

久作

それから、もう一つ。これは勿論夫婦になってからの話なんです、くどいようですが、夫婦というのは媾合をします。

とめ

——

久作 —— そうした場合には、今度は青鉛筆でペけ印をつけて頂きたい。

とめ —— ペけ——？

久作 そうしたら、将来、とめさんが妊娠した場合、どのペけで受胎したのかが判るかもしれない。

とめ どうしても—— そうしなければいけないませんか。

とめ

久作 お願いします。とめさんにしか頼めません。

とめ

それは——

とめ、苦惱。

その時、再びキヨが陣痛を訴える。

キヨ

あゝ、あたたたたた。

半三郎

おキヨさん？！

キヨ

そろそろ、我慢がきかなくなってきた。あたたたたた！

待合室から、キヨの叫び声が聞こえて、気が気でないとめ。

久作は月経カレンダーのことで頭が一杯で聞こえない。

より子、診察室に飛び込んでくる。

より子 先生！ 荻野先生！

久作 (より子に) ちょっと、待って下さい！
より子 はい。

取り乱している新米看護婦のより子は久作の言うことを聞いてしまう。
待合室に逆戻りして、キヨに、

より子 ちょっと待って下さい。

陣痛が激しくなってしまったキヨ、苦しんでいる。

腰をさすってやっている半三郎。

教科書を読み続けているより子。

診察室には、どうしていいか判らないとめ。

そして、カレンダーを差し出している久作。

久作 お願いします！

キヨ あたたたた！ 生まれてしまう！

とめ　——カレンダーをつけなければ、お嫁に貰って頂けないんですね。

久作　そんなことはありません。私はカレンダーをつけないとめさんであっても是非お嫁にきて頂きたいです。

とめ　そうですか。

久作　——しかし、私の研究には月経カレンダーをつけてくれる方が必要なんです。それは妻になってくれる人に頼むしかありません。でも、とめさんがそれをつけたくないというのでしたら——論文ととめさんが両立しなくなってしまう！　どうしよう。どうすればいいんでしょう。

久作、悩んでいる。

とめも悩んでいる。

待合室ではキヨが苦しんでいる。

キヨ　——ああ。頭が。

半三郎　頭が?!

キヨ　頭が出てきた気がします。

半三郎とより子、キヨを連れて診察室になだれ込んでくる。

半三郎 先生！ 頭が出てきた気がするそうです！

久作 (ようやく事態に気づき) なんですって?! すぐこっちへ (治療室の扉を開けつつ)
半三郎 はいっ!

半三郎とより子、キヨを治療室に運び込む。

久作 とめさん、できれば、できればお願いします。とめさんにお嫁に来て頂きたいんです。

久作、治療室に駆け込む。

とめ、一人残される。

治療室から、四人の声が聞こえる。

とめ、じっと治療室の方を見つめる。

より子 先生！ これは、これは何ですか?!

久作 破水です!!

より子 破水?!

半三郎 津島さん！ 破水してるのにノートなんかつけるな！

より子 判ってますわ!! ああ〜っ!!

半三郎 先生！ 児頭が見えています！

キヨ 痛い。痛いですて〜、先生〜！

久作 おキヨさん、あまりいきまらずにゆっくり息をして下さい。

キヨ わ〜、すつごく痛いんですて〜。

久作 大丈夫だ。もう少しで頭が出る！

キヨ えーんやこーら！ こんちくしょう!!

より子 ああ〜っ?!

半三郎 頭が出ました！

久作 ようし、あとは楽ですよ、おキヨさん！

キヨ 全然、楽じゃねえですて〜！

久作 頑張つて下さい。こんな楽なお産はないですよ！

キヨ じゃあ、先生が替わつてくなんしょ〜！

久作 それは無理です！

より子 あ、あ、ああ〜っ!!

赤ん坊の産声。

とめ、緊張がゆるんだのか、腰が抜けたように座り込んでしまう。
治療室からの声続いている。

より子 生まれました！ 生まれました！

半三郎 生まれましたよ。おキヨさん！

久作 ほら、おキヨさん、元氣な男の子です。

キヨ お世話をお掛けしましたね、先生。

久作 とんでもない。驚くべき安産でした。

キヨ お手数ですども、亭主に知らせちゃ貰えませんか。こんげに早^{はよ}う出てくると思わ
なかったすけ。

半三郎 判りました。

それを聞くと、とめ、治療室に向かって、

とめ 荻野先生！ 私、お知らせに行つて参りますいね。

キヨ そうですか。すみませんね。奥様に行つて頂くなんて。

久作 おキヨさん、まだ結婚したわけでは――

キヨ 病院の西の方にちよつと行つたところで。酒井義助つて表札が出てますんで。

とめ 判りました。行って参ります。

久作 すみません。お願いします。

とめ、行きかけて立ち止まり、カレンダーを手に取る。

それを丁寧にしたんで懐に入れる。

そして、出ていく。

治療室から赤ん坊の産声が聞こえている。

暗転。

暗転中、久作が日記を読む声が聞こえている。

久作(声)

「五月十八日。晴れて暖かし、まことに良き日なり。午後より、祝言の宴。仲人の竹山院長の紋付き姿、まことに滑稽なり。緊張するかとも思いつが、花婿というのは、存外冷静なものなり。夜、急患あり。

五月二十日。研究に掛かるうにも、診療多忙にて、一向に進まず。相変わらず芳しき結果は得られず、落胆する日々なり。子宮癌の手術あり、古井くんの欠勤のため、高見医師が助手についてくれる。高見の外科医としての手腕に感嘆せり。

五月二十八日。古井くと津島看護婦は、どうにも馬が合わぬ様子。頭痛の種な

り

オーバーラップして翌年の日記になっていく。

一年が経過したのである。

久作(声)

「七月十日。暑し。夕刻になり、涼風至る。とめ、吊忍を買い求め、軒先に吊るす。風流とはかようなことかとしみじみとす。所帯を持ち、はや一年余りなり。養母の小言も、とめに対して日増しに遠慮がなくなる。とめはよく我慢している」

第二場 夏

第一場の翌年の夏。

窓は全部開けられている。

久作の机の上には、扇風機が置かれている。

蝉が鳴いている。

昼休みの少し前。

久作、半三郎、より子は治療室で患者さんを診ているらしく、診察室にはいない。

待合室にはキヨとハナ、おしゃべりに花が咲いている。

ハナは「先生に差し上げるために」と持ってきた籠を抱えている。

キュウリやナスなど、自分の家で採れた夏野菜である。

ハナ 「子ができねえ嫁の滋養になるなんて、これじゃあイワシも浮かばれないねえ」っ

て。

キヨ イワシぐらいケチケチするなっていうがだよねえ。

ハナ ンだけど、それをお父ちゃんとが聞いてて、台所に飛び込んで来て、お義母かさんに食って掛かったのよ。「おハナにそんなこと言うなら、俺は飯食わねえ。俺の分をおハナに食わせてやるんだ」って、そう言ってくれたのよ。

キヨ なんだい。愚痴かと思つたら、結局お惚気のろきに終わるわけだね。

ハナ ンだけど、そんな苦労ももうお終い——

キヨ だから、今のは苦労話じゃのうて、お惚気のろきなんだてば。

ハナ ——私も赤ん坊ができたんだすけね！

キヨ そうなのかい。そりゃあおめでどう。

ハナ だから、おキヨさんに色々教えてもらわんけりゃあつて思つて。どんな気持ちなんですかね？ 赤ん坊が生まれる時つて。

キヨ 生まれる時は痛えだけ。生まれた後はうるせえだけ。

ハナ いいわねえ、痛くてうるさいの。いいわねえ。

キヨ そう言っていられるのも、今のうちだて。

久作、半三郎、より子、治療室から出てくる。

妊婦（六ヶ月くらい）、帰っていく。

久作 次の方を。

より子 野村ハナさんです。

半三郎 —— おハナさん、ですか ——

半三郎の顔が少し曇る。

久作も同様である。が、決心して、

久作 (より子に) お呼びして下さい。

より子、待合室のハナに、

より子 野村ハナさん。

ハナ はいっ！ はいっ！

ハナ、喜び勇んで入ってくる。

ハナ 失礼します！

久作 どうぞ（お掛けください）

ハナ （野菜の籠を差し出し）あの、先生、これつまらないもんですども、どうぞお納め下さい。

久作 おハナさん、そんなに気を使わないで下さい。

ハナ どうしても先生に食べて頂きとうて。

久作 ——ありがとうございます。

ハナ （意気込んで）先生、やっぱり身ごもってましたでしょうかね?! おとこっことでしょうか? おんなっことでしょうか? 五体満足でしょうかね? あの、今夜、内

祝いやろうかってことで、先生にも是非来て頂きてえと、お父^とちゃんが申しまして、ご迷惑でねかったら、皆さんで是非。御馳走^{んめ}といつても何もねんですども、あの、親戚に造り酒屋がごぜえまして、旨^{んめ}え酒を貰って参りましたんで、それだけは先生に呑んで頂いても恥ずかしくねえもんなんでごぜえます。

久作 ——あのですね、おハナさん——

ハナ はい、あ、先生、お義母^かさんは、総領息子を産んでくれて言いますども、お父^とちゃんは、こっそり私に『おんなっことでもかまわねえからな』って言ってくれましたんで、私、おんなっことでも胸張って産むことができます。ご安心下さいませ。

より子 まあ、おハナさん!

ハナ はい？

より子 女の子でも構わないなんて言われて、黙っていることはないんです。

ハナ はあ、でも、お父^とちゃんは私を心配してそう言ってくれたんで——

半三郎 津島さん、今はそんなこと言ってる場合じゃないんです。

より子 いいえ、そういう些細なことから改革していかなくては。

半三郎 少しは黙っていられないんですか?!

久作 静かにして下さい。

半三郎 ほら、先生もああ仰ってる。

久作 二人ともです。

二人 ——はい。

久作 ——おハナさん——実は、言いにくいことなんです——妊娠ではないようなんです——

ハナ え？

久作 ——おハナさん、身ごもってはおられないんです。

ハナ ——でも——でも、今月はまだ月のもんがございませんですいね。

久作 ——それでも、妊娠ではないようなんです。

ハナ ——ニンシンではねんですか——

久作 月経の方が少し遅れているだけのようなんです。

ハナ
———そうですか———私の早とちりですか。

ハナ、明らかに気落ちしている。

一同、何を言っているか判らない。

ハナ
なんか、大騒ぎしてしても、お父ちゃんやお舅さんたちにも、糠喜びさせて———恥

ずかしいです。

半三郎
おハナさん、どうか気を落とさないで下さい。

久作
———残念です。すみません。

半三郎
———すみません———

一同の申し訳なさそうな顔を見て、ハナ、頑張つて気を取り直し、

ハナ
いえの、先生のせいではねえです。謝つて頂くなんてとんでもねえことです。こればかりは授かりものですすけ、仕方ねえです。また頑張りますすけ、これからもう宜しくお願いいたします。

久作
おハナさんにそう言つて貰えて、ほっとしました。———実は、もう一つ、お話ししたいことがあるんです。

ハナ はい

久作 おハナさんに、ちょっと異常があるのが見つかったんです。

ハナ 病気でしょうか。

久作 子宮筋腫です。

ハナ ——シキユウキンシュですか。

久作 はい。

ハナ ——それで、それで私は、あとどれくらい生きられるでしょうか？

久作 ——え？

ハナ そのシキユウになったら、どれくらいでお陀仏なんですか？

久作 ——子宮にはならないんです。女性なら誰でもあるんです。

ハナ そのキン——キン——

久作 ——筋腫、つまりできものです。でも、命に別条はありません。それを取れば、妊

娠しやすくなると思います。

ハナ そのシュを治したら、赤ん坊が授かるがですか？!

久作 そう、手術をすることにはなりますが。

ハナ 手術——大丈夫でしょうか。

久作 大丈夫です。難しい手術ではありません。

ハナ あの——でも、手術となると、随分費用が掛かりましようねえ。

久作 それは、まあ――

ハナ ――またお義母かさんに「おハナは子どもできねえくせに金は一人前に掛かって」なんて――

久作、言うべき言葉が見つからない。

ハナ、じつと考えて、

ハナ ――先生、手術すれば、赤ん坊が授かりますよね？

久作 おそらくですが。

ハナ それでしたら――なんとかして――

久作 おハナさんの筋腫は、すぐにも手術が必要という状態ではありません。費用のことも判るようになっておきますから、ご家族の方とも相談して、もう一度いらして下さい。

ハナ ――はい。

――先生――やっぱり、本当に身ごもってはいねんですね？

――はい。

半三郎 ――おハナさん――

より子 おハナさん、子供を産むということだけが全てじゃないんですから。

ハナ はあ——

半三郎 津島さん、あなたという人はデリカシーというものの無い人だなあ。

より子 なんですって?!

久作 二人とも!

ハナ、険悪な雰囲気になったのは自分のせいかと思って、何とか気を取り直して、頑張つて新しい話題を考え出す。

ハナ ——あ、あの先生、学問の方はなじよ（いかが）ですか？

久作 え？——ああ、まだまだ先は長いです。どうすればいいのか困っているところなんです。

ハナ 私、お手伝いいたしますいね。

久作 それは、ありがたいですが——

ハナ 私のできることでしたら。

久作 そうですか——それじゃあ、ちょっと質問させて下さい。えーと——おハナさんは、最近も、お父ちゃんとは、その、随分、仲はいいんですか。

ハナ はい。喧嘩なんかは滅多にしねえですし。

久作 それはいいことですね。——えーっと、何と言うか——

ハナ ——それに、あの、義母^かさんに、時々——いえ、意地悪じゃねんですが、ちよ

こつと言われたりすることがあるんですけども。

久作 ——それは辛いですねえ。

ハナ ちよこつとは辛い時もあるがです。私がやつぱり悪いのかなあつて、思うがですど

も、そんな時、お父^とちゃんは「おハナが悪いんじゃないやねえ。こういうもんは、授かりもんだすけ」つて庇つてくれますし。

久作 随分優しいお父ちゃんなんですな。

ハナ 優しいんです。お父^とちゃんがいねかつたら、私——

久作 おハナさんにはお父^とちゃんがいて良かったですねえ。

ハナ はい（上手く答えられて大満足）

久作 ——えーとね、伺いたいのは——その、もっと実際的なことなんですが——

ハナ はあ、あの私、上手く答えられなかったでしようか？

久作 いやいや、おハナさんは、凄く上手く答えてくれてるんです。ただ、それだけじゃなく、——つまり——夜の生活では、お父^とちゃんとは上手くいつてるのかどうかつて

ことも伺いたいたんだが——つまり、何というか——

ハナ あ、コーゴーのことですか。

久作 そうなんです。そのコーゴーです。

ハナ そうですよ。喧嘩のことやなんかお話ししても仕方ねえですよ。

久作 いやいや、そういうことも大事です。そう、大事です。

ハナ —— コーゴーのことですね——（ちよつとためらうが、決心して）そうですねえ。

お父^とちゃんは、いつも、その、そうする晩には、井戸端で野菜を洗つてる私んところへ来て、お義母^かさんには聞かれぬように、小せえ声で、「今夜は、な」って——

久作 うんうん。あの、そういうことじゃなくて。

ハナ それで、私は、その晩は風呂に入^へって——わあーっ、先生、やっぱり、こつ恥ずか

しくてこんげなことは話せません！

久作 そうですね。えーと、じゃあ、私の質問に答えてくれればいいですから。

ハナ はい。

久作 最後の月経のあとは、いつありましたか？

ハナ いつって——覚えきません——

久作 ——なるほど。じゃあ、そうなる晩は、大体、一週間は何回くらいあるんですか？

ハナ そうですね。大体ですね、一週間だとうなるかは、よく判らねんですども、一日置きか、毎日か——

久作 それは、随分——仲がいいですね。

ハナ やっぱり、そうでしょうか、先生。あんまり、仲良くし過ぎると子種が薄くなつて子供がでかねえって聞いたことがあるんで、あの、二人で我慢しようって、そうしたことがあるがですども、やっぱりお父ちゃんが「やらなきや赤ん坊はできね

え」って——あー、また恥ずかしいこと言ってしまった——

久作 うーん、なるほど。

ハナ どうなんでしょうか。

久作 婦人の排卵日はいつなのか、その法則が、その謎が判れば——（考えてしまう）

ハナ 先生、先生。

久作 （気づいて）ああ、すみません。ご協力ありがとうございました。

ハナ こんげなことでよろしいがでしょうか。

久作 大変役に立ちますよ、ありがとうございます。

ハナ はい、ありがとうございます。

より子 お大事に。

ハナ、深々とお辞儀をして出ていく。

診察室の中では、泣くまいと頑張っていたが、出て来た途端に、我慢できなくなつて涙が出てきてしまう。

キヨ どうしたんだい？

ハナ、キヨに気づき、慌てて笑顔を作り、お辞儀をすると、小走りに出て行っ

てしまふ。

ハナを見送るキヨ。

キヨ

診察室では、久作が次の患者を呼ぶようにとより子に指示している。

半三郎はハナが置いていった籠を片づけているが、ハナに同情して、ちよつと涙ぐんでいたりする。

より子、待合室に出てきてキヨを呼ぶ。

より子

酒井キヨさん、どうぞ。

キヨ

はい。(立ち上がって) あ、そうだ。のう看護婦さん。

より子

はい。

キヨ

おめさん、まだ一人者だよね。

より子

はい。

キヨ

おらの遠縁にいい年頃の美男子がいるんだども、おめさんとちよつど似合いたと思
うんだども、どうらかね？

より子

せつかくですけど——私、結婚はしないって決めているんです。

キヨ あら、どうして、勿体ねえ。

より子 男性の隷属物にはならないで、自由に生きていきたいんです。

キヨ レーゾクブツなんて難しいもんじゃねえんだよ。ただの女房なんだすけ。

より子 どうぞ、お入り下さい。

キヨ、診察室に入る。

キヨ 失礼しますいね。

久作 どうぞ。

キヨ それで、先生、どうなんでしょうかね。

久作 おめでどう。やっぱりおめでたですよ。三ヶ月。

半三郎 —— おめでどう、神様の思し召しですな。

キヨ —— やっぱり、そうらかね。

久作 そうです。

キヨ そうじゃねえかなあとは、思ってたんですども——

久作 どうしたんです？ ああ、もしかすると、また悪阻がひどくなる恐れもあるかもしれ

ませんが、できるだけのことはしますから、大丈夫ですよ。

キヨ 先生、何人目だと思えますいね？

久作 えーと、七人目でしたか（カルテを見てみる）

キヨ 八人目ですいね。

久作 （カルテを見直して）そうだそうだ、七人目のお子さんは去年私が取り上げたんでした。元氣ですか、末吉くんは？

キヨ おかげさまで。

久作 そりゃあ、良かった。

キヨ でも、まだ子供たち皆ちっさくて。また姑にも言われるこてね。「一人前の働きもできねくせに、ガキばっか、ゴロゴロ産みやあがって」なんてね。

久作 八人もの子宝に恵まれるお母さんなんて、一人前以上の働きですよ。

キヨ ——先生——できるがでしょ？

久作 何がですか？

キヨ ——あの、子供を、流して頂くとか——そういう——

久作 おキヨさん、堕胎を希望されるんですか？

キヨ いえ、あの——

半三郎 おキヨさん、神様は、生まれるべき子供を人の手で葬り去ることをお許しにはなっていない。人に命を与え、命を奪うことができるのは、神様だけなんです。

より子 古井先生、今のおキヨさんの問題はそういうことじゃないんです。

キヨ ——子は宝だって言いますが、その宝を育てていくにも金がいるし、どうしても

そういうことを考えちまつて——そうしたら、生まれて来ない方がこの子にも私らにもいいんじゃないかねえかつて——

半三郎

おキヨさん、貧困も神が与えたもうた試練なんです。

より子

古井先生、それは教会で言うことです。ここは病院なんです。婦人の幸せのための病院なんです。

半三郎

幸せって——

久作

二人とも！

二人

はい。

久作

おキヨさん、墮胎をすることはできません。

キヨ

——鬼みてな親だと思つてなさるんでしょうの——

久作

おキヨさん、この台所が苦しいのも判ります。だから、よく考えて下さい。ご家族にとつてどうするのが一番いいかを。

キヨ

——先生、家で亭主と相談してみますいね。

久作

そうですね。旦那さんとよく相談して、もう一度、いらして下さい。但し、墮胎を決めた時には、必ず病院に来て下さい。病院でなら、安全ですから。

キヨ

はい。

より子

おキヨさん、まずご自分の幸せを考えるべきですわ。

キヨ

——おらだつて、授かった子は生かしてやりてんです。

久作 判ってます。判ってますよ。

キヨ こんげなこと考えちゃうなんて、おらの育ちが悪いわ……のかもれませんども、うちの里の方じゃ、子供が生まれた時、産婆さんがこう聞くがです。「おきますかの、もどしますかの」って。

久作 もどしますかって——

キヨ この世におかねえで、あっちに戻すってこつてす。それが当たり前でした。おんなつこだと戻されることが多いんです。そりゃあそうです。おら、兄弟七人いますども、貧乏でしたども、お父ちゃんもお母ちゃんも、おらを戻さねえでくれました。それなのに、おら——

久作 おキヨさん。

キヨ ——いっち上は、もうすぐ尋常小学校を出ます。奉公にもいげる歳だし、おらもお父ちゃんも、まだまだ若わえし、何とかなりますて。

——せつかく、神様が授けて下さったんだすけ、おらが生まれて来るななんて言うたら、罰があたりますてのう。

半三郎 ——おキヨさん。

久作 いいんですよ、もう一度、ゆっくり考えて下さい。

キヨ 判りました。ありがとうございます。

より子 おキヨさん、自分だけが苦しんだりしてはいけませんわ。

半三郎

おキヨさん、神様はいつもご覧になつてゐるんですから――

久作

(二人の言い争いを止めようと) お二人さん、事務室に荷物が来ていたので、ちよつと二人で取りにいつてくれませんか。

二人

――はい。

二人、出ていく。

キヨ、出ていきかけたより子に、

キヨ

看護婦さん、ほんとにさっきの縁談どうかね。いい子なんだよ。

より子

――いいえ、せっかくですけど。

キヨ

そうだね。おらみてえな苦労はしたかねわね。看護婦さんは職業婦人だすけ。立派にやつていけるすけね。

より子

より子と半三郎、キヨと久作に一礼して出ていく。

キヨ

――先生、三ヶ月つていうとどんくらい大ききさになつてゐるんでしょうかの。

久作

――そうですね。身の丈は三寸というところです。

キヨ 腹の中にいて、見えねえからって言っても、もう人なんですすけね。——先生、望

久作 おキヨさん、私は——

キヨ いえ、いいんですよ——失礼します。

そこへ、とめが凄いい勢いで飛び込んでくる。

息を弾ませて、怒りに震えている。

とめ あなた！

キヨ あれ、奥さん。

しかし、とめはキヨのことも目に入らない様子である。

久作 ——どうしたんです。

とめ 聞いて頂きたいことがあるがです。

久作 今ですか。

とめ 今です。

久作 何が起こったんです？

とめ 私、家を出てきました。

久作 ええっー?!

とめ もう、我慢ができません。私を離縁しなさるか——

久作 ええっ?

とめ お義母様に、お一人で故郷に帰って頂くか、どちらかにして頂きます!

久作 そんな——

キヨ、「じゃあ、おらは——」とかなんとか言いながら、出ていこうとする。
しかし、とめの怒りの凄まじさに圧倒され動けない。

とめ あんな目茶苦茶を言われて、黙ってるなんてできません! 毎日毎日、お義母様には色々言われても我慢してきました。でも、今日という今日は、絶対に耐えられません!

久作 何を言われたんです。

とめ お義母様が——見つけてしまいなされたがです。

久作 何をですか。

とめ ——私の月経カレンダーをです。

カレンダーを取り出して久作の机の上に叩きつける。

久作 産婦人科医の妻が月経の記録をつけて何が悪いんです。

とめ —— 義母様が仰ってるのは、月経の記録のことじゃないがです。

久作 —— じゃあ、まさか——

とめ そのまさかです。

久作 (キヨを気にして小声で) —— ペけのことですか。

とめ (キヨに気づいてないから大声だ) そのペけです!

久作 —— ペけですか——

キヨ —— ペけ?

とめ 「この青いペけ印は何だ。これはきつと夫婦のことに違いない」って。

久作 (キヨを気にして) とめさん、その話は家に帰ってから——

とめ 「そんなことを一々記録に残しているなんて、何て嗜^{たしな}みのない嫁なんだ」なんて仰るがです!

久作 とめさん、その話は後で——

とめ 今ですっ!

久作 (諦めて) だから、そのペけも研究のために——

とめ 私がそんなことを言って、聞いて下さるお義母様だと思います?!

久作 聞いてくれないお義母さんかもしれない——

とめ そうです。聞いてくれません、私が黙っていると、まだまだ言うがです。聞かせて差し上げます。

久作 いや、き、聞かなくても——

とめ いえ、聞いて頂きますいね。「お前は、そういうことが好きでこんな記録をつけているのだろう。色好みなのに久作が忙しくて相手にきれいなものだから、こんなものをつけて当てつけているんだ」と。「べけ印が月に三つでは満足できないなんて、なんてはしたない嫁だろう」ですと！

久作 ——確かに聞きました。

とめ 私はもう悔しくて悔しくて。あなたから言って下さい。これは論文のため、博士号のためにどうしても必要なものなんだって。

久作 判りました。折りをみて言いましょう。

とめ 今です！

久作 ちよっと待って下さい——

とめ 私のことにかまっている暇はないって仰るがですか?! 私は、あなたの研究のために、お義母様に叱られたがですよ!! あなたは、研究だ研究だといって真夜中に帰っていらっして、話を聞いても下さらないし、お義母様はお義母様で、あなたの研究が進まないのは私の心掛けが悪いせいみたい、毎日毎日仰るし！

久作 (ついにかつとして) じゃあ、何です! 悪いことは皆私の研究のせいだって言う

んですか?!

とめ そんなことは言っておりません!

久作 言ってるじゃないですか!!

とめ とにかく私は、もうこんげなものは、生涯、金輪際、何があってもつけませんす

け!

カレンダーを取って、くしゃくしゃにまるめると投げ捨てる。

カレンダーはキヨのそばに落ちる。

キヨ、それを拾って眺める。

とめ もしどうしても必要なら、お義母様につけて頂いて下さい!!

久作 お義母さんには、もうつけるものがないでしょう!

とめ あなただって、私の苦勞を少しは思い知ればいいがです!

キヨ、とめに向かつて、

キヨ じゃあ、奥さん、先月は月のもんがなかったかですかの?

とめ え？

キヨ んだって、ほら——（示してみせる）

とめ （キヨがいるのに初めて気づいて、取り繕いながら）——そうでしたっけ。

キヨ こりゃあ——おめでたじゃねえがかね。

久作・とめ ええっ？

キヨ 先生、見てご覧なせえまし。

久作ととめ、それを覗き込む。

久作 ほんとだ。ない。

とめ ほんとだ。ない。

キヨ おめでたですて。

久作 （キヨに）おめでたですか？

キヨ 間違いありませんね。

久作 ——できたのか？ できたのか？ とめ！

とめ さあ、どうでしょうか。

久作 でかしたぞ！ でかしたぞ！

とめ ——はい。

久作
とめ
ばんざーい！ ばんざーい！
——あなた。

大騒ぎしている久作。

戸惑いながらも喜びを隠しきれないとめ。

キヨ、その二人を見ながら、そっと出ていく。

暗転。

暗転中、久作が日記を読む声が聞こえる。

久作（声）

「十月二十日。夜、虫の声盛んなり。帰宅深夜となる。疲労、流石に深し。余の論文も進展見られず。婦人の排卵の時期を特定せる試みは、余の手に余れる愚行かとも思いしが、謎を解明し、未知の事実を既知と成すことこそ人類の進歩にして、余の進むべき道と、決意新たにせり。

十月三十日。研究の為、帰宅深夜になる。川村教授から論文の催促あり。返答に窮し、言葉を濁す。

十一月一日。研究の為、帰宅深夜になる。早朝、急患。少々、睡眠不足なり。

十一月五日。帰宅、明け方になる。疲労、甚だし。婦人の排卵は、月経が始まって

より、一体何日後に、あるいは、どんなきっかけにて起こるのか。疑問はいかにしても解けず。

十一月十日。帰宅深夜になる」

第三場 秋

二場と同じ年の秋。

窓の外に、色づいた葉が舞い散るのが見える。

診療時間も終わった夕暮れから夜。

外科医の高見詠一、一人で、机の上の久作の論文の資料や原稿を勝手に眺めている。

洒落た身なりをした、医者にしてはちょっと軽い感じの男。

論文のノートを取り上げて、読む。

高見

——排卵の時期、黄体と子宮粘膜の周期的変化との関係、子宮粘膜の周期的変化の周期及び受胎日に就て。爾来余は此等の問題に關して研究を持統せるものなり。余の見解は従来の文献に於ける種々の矛盾を証明統一し、進んで既往文献きおうに於ける疑問を解決し得るものなりと信ずる——なるほど、大した気張りようだな荻野先生。

——で？

次を読もうと、ページをめくる。が、それ以上何も書かれていない。

高見
何だよ。ここまでかい？

そこへ手術を終えた久作と半三郎が、廊下から待合室に入ってくる。

久作は、白衣を脱いで、手に持っている。

疲れ切った様子で、待合室の椅子に座り込んでしまう。

半三郎
有茎筋腫の結紮けっさつも、腫瘤の切除も、見事な手際の素晴らしい手術でした。先生、本

当にお疲れ様でした。

久作
あれを取ったんだ。おハナさんもきつと身ごもることができるとでしょう。

半三郎
——— そうですね——— 先生、ありがとうございます！

久作
（なぜ、そんなに熱心に半三郎にお礼を言われるのか判らない）いやいや。古井くん、お疲れ様でした。今日はもう結構ですよ。

半三郎
先生は？

久作
いや、私はまだ——

半三郎 論文ですか？

久作 そうです。

半三郎 ここのところ、毎晩夜中までじゃないですか。大丈夫ですか？

久作 大丈夫、体力だけが私の取柄です——まあ、正直、もう少し時間があればと思いませんがね。

半三郎 先生、僕にできることがあれば——

久作 大丈夫です。症例の記録なんかは自分でつけなければ——あ、そうだ。おハナさんの卵巣に新しい黄体ができていたでしょう。見ましたか。

半三郎 気がつきませんでした。

久作 あれなら、多分、十七日以内に月経が来るでしょう。

半三郎 十七日以内——ですか？

久作 言うまでもないことですが、卵巣にできる黄体は排卵して卵子が飛び出したあとにできるものです。

半三郎 はい。

久作 手術の時などにできたばかりの黄体を見た時は、必ずそれから十七日以内に月経がみられるんです。あとでおハナさんに月経がいつ来たか確かめるのを忘れないようにしないと。

久作、手帳を取り出してメモするが、心底疲れているようである。

半三郎

先生の粘り強さには敬服します。開腹手術の度に必ず卵巣を確かめられる。僕も大
学の方で何人もの教授の手術につきましたが、大概の先生は「ああ、黄体がある
な」というだけでそれ以上追求しようとはしない。研究が専門の大学の先生にして、
そんなもんです。

久作

しかし、肝心なことが掴めないんです。時々、こんなことを続けていて意味がある
のかどうか、判らなくなる時がありますよ。

半三郎

先生は必ず謎を解かれると僕は信じてします。神が先生の研究を見守って下さって
いますから。

久作

(少々ぞんざいに)——ありがとうございます。

半三郎

あ、先生、お夕食は。

久作

ああ、家内が届けてくれることになっていきますから。

半三郎

奥様もお腹に赤ちゃんがいるのに、大変ですね。

久作

——なんとか少しでも早く糸口が掴めればとは思っているんですが。

半三郎

大丈夫ですよ。もう少しです。頑張ってください。

久作

ありがとう。

久作、やっと腰を上げて診察室に入ってくる。

そこには、高見がいる。

高見
よお、荻野。

久作
ああ、高見、どうしたんだ。

高見
今日、当直なんだよ。残ってるのはお前くらいじゃないかと思って暇つぶしに来たんだ。

帰ろうとしていた半三郎、高見の声に気づき、診察室に入ってきて、

半三郎
高見先生！

高見
よ、アーメン君、調子はどうかね。

半三郎
アーメン君?! アーメン君で何ですか、高見先生?!

高見
失敬。悪気はないんだ。

半三郎
申し訳ありませんが、荻野先生はお忙しいんです。失礼ですが先生の遊び相手をしてる場合じゃないんですよ。

久作
——まあまあ、古井くん。

高見
ほら、荻野先生もああ仰ってる。

半三郎 しかしですぬ——

高見 古井くん、君もこんなところで遊んでちゃ駄目でしょう。

半三郎 遊んでなんか——（いません）

高見 大学の研究室の方はいいのか？ 荻野の所に入り浸っていると、学者の出世街道か

ら取り残されるぞ。君は、診療医になるつもりなんかないんだろう。

久作 古井くん、私もそう思いますよ。研究室の方は大丈夫なんですか。

高見 ほら、荻野先生もああ仰ってる。

半三郎 僕は、荻野先生のお手伝いができることこそ望みなんです。出世なんか何の意味も

ありません！

高見 素封家でクリスチャンのぼんぼんは、俗世の欲望とは無縁というわけですか。いい

なあ、道楽で人生やっていけるなんて。

半三郎 だから、道楽じゃありません！ 研究室に行ったからって、何の意味があることが

できるといふんです。毎日、ガマガエルを捕まえに行かされるだけです。

高見 君は学者になるつもりがないっていうわけか？ 噂によると、ドイツ留学の話が

あったのに、断ったそうじゃないか。

半三郎 あ（それは久作には聞かせたくなかった）

久作 ——それは初耳です。本当ですか、古井くん。

高見 （半三郎に）ごめん（言っちゃって）

久作 古井くん、そんな絶好の機会をなぜふいにしたんです。

半三郎 ——ただ漫然とドイツに行っただって何ができるといふわけではありません。それよ

り、僕は先生のお手伝いを——

久作 (さえぎって) 古井くん、自分のやるべきことは自分で見つけなくてはいけないん

です。

高見 そうそう。

久作 研究室の方にもきちんとして行って下さい。

半三郎 ——はい。失礼します。

半三郎、出ていく。

久作はやる気なさそうに、研究ノートを開いてみたりしている。

高見 ところで、津島より子ちゃんは、もう帰ったのかしら。

久作 なんだ。本当のお目当ては彼女か？

高見 そうだよ。

久作 帰ったんじゃないのかな。気分が悪そうだった。いまだに手術に慣れないらしい。

高見 いいなあ。偉そうにしてる癖に、仕事ができないハイカラ娘。好みのタイプだなあ。

久作 彼女の方は君のようなのは、あまりタイプではないのじゃないかな。

高見 そうかあ。照れちゃうな。彼女一体どうして看護婦なんかやってるんだ？

久作 知らん。

高見 東京で女優をやってたって噂もあるし、政治家の愛人をやってたって噂もある。本

当の所はどうなんだ？

久作 だから、知らん。

高見 興味ないのか？ 君は男性機能不全か？ 専門用語でいうなら、インポテンツだ。

久作 頭の容量が一杯で、他のことが入る隙間がないだけだ。(ノートをとりあえず見たりする)

高見 診療と研究と、家に帰れば女房と姑が大喧嘩か。研究だの結婚だのするもんじゃないな。

久作 気が滅入るのは、義母の口鉄砲だ。博士号はまだ取れぬのか。なんのためにお前を養子にして金を掛けて大学まで出してやったんだ。博士様になって国元みかわの三河に戻って医院を開業し、馬鹿にしてくれた人たちを見返してやるためじゃないか。鉄砲どころか機関銃だな。

高見 つまり、研究論文の方は進んでないわけか。

久作 ——さっぱりだ。いつまでもでき上がらないんじゃないかという気になるときさえある。

高見 大体、診療をしながら研究もしようだなんて、どう考えても無茶だ。そろそろ諦め

たらどうなんだ？

久作 —— そうかもしれないが ——

高見 それに、君のテーマは無謀過ぎるぞ。

久作 —— 無謀だって？

高見 婦人の排卵がいつ起こるのか。これには世界の第一線の学者が挑んでいる。それく

らい外科の俺でも知っていることだ。

久作 そうだ、そして未だ謎は解けていない。だから、それをテーマに ——

高見 ドイツのシュレーダーが、大正六年に排卵は月経開始後の十四日から十六日の間に

起こるという学説をすでに発表してる。シュレーダーがそれを実証できれば、君の研究は意味が無くなる。

久作 確かにそれは、月経の周期が二十八日型が多い欧米の婦人には、当てはまっている。

しかし日本の婦人に二十八日周期は少ない。その場合、シュレーダー説では、例外が多すぎる。シュレーダーがそれを実証するのは無理だと私は考えている —— だから、私とその謎を解く可能性は十分にあるんだ。

高見 誰でもそう思っちゃうんだな。寄ってたかって皆が新説を発表しまくってるらしいじゃないか。

久作 曰く、排卵は月経開始後、八日ないし十四日である。いや、十一日ないし二十六日

の間でなかんずく十八日から十九日に最も頻繁に起こる。あるいは、排卵は随時に起こるのだという説。性交時の刺激が卵子を排出させるのだという説。

高見 目茶苦茶だな。なんでもありだな。性交すると卵子が出るんだったら、百発百中じゃないか。

久作 俺は、そんな口から出任せのような学説を発表するつもりはなし。自分が見つけ出した真実を発表するんだ。

高見 だがな、ドイツ医学界には最新の知識と最新の設備がある。自分で言うのも悔しいが、日本人がそれに敵うわけがない。しかも、こんな新潟の片田舎で、診療の片手間にだ。それで何ができる。

久作 だからこそできる。手術をする。そうすれば、患者の卵巣を、黄体を観察することができる。手術の後で、いつ月経が起こったかその患者に尋ねることができる。そうすれば、それが症例になる。研究室に閉じこもって、ウサギやモルモットの卵巣とにらめっこしている輩とは、違うことができる。それが、俺のやり方だ。

高見 それは、何のための研究なんだ？

久作 え？

高見 お前も俺も、ただの町医者じゃないか。そりゃあ、博士号を貰えば、医者として箔がつくかもしれない。ここよりも、もっと高給で雇ってくれる病院もあるかもしれない。それなら、もっと無難な論文でいいじゃないか。なんてまた、そんな解けるか

どうか判らない謎に挑もうとするんだ。

久作 それは——それが、謎だからだ——

高見 君のような人物は我輩の辞書では馬鹿と言う。

久作 馬鹿かもしれないな。

高見 俺たちには、そんな大それた研究は贅沢品だ。そんなことは、ドイツや帝大の学者共にやらせとけばいいんだ。その研究成果を、あとから俺たちが頂いて自分の商売に役立てれば、それでいい。できるかどうか判らない研究なんて、俺からみれば、道楽だ。

久作 ——道楽、か。

高見 博士号を取るつもりなら、急いだ方がいいぞ。

久作 ——判っているが、診療の方が忙しくて、思うようにはいかない。

高見 ——君の担当の川村教授が転勤されるらしいじゃないか。

久作 (非常に驚いて) いった？

高見 来年の三月あたりか。はっきりはしないらしいが。

久作 ——そうなのか。そんな話、誰に聞いたんだ？

高見 昨日、新潟医大に行ったんだ。高校の時、同級だった奴がちょっとした研究発表をするというんでね。大学の時、こっちは東京、あっちは新潟で、正直、勝ったと

思ったが、今や、あいつは教授への道まっしぐら。こっちはしががない雇われ医者だ。

ま、人生なんてそんなもんだ。

久作 担当教授が変わったら、研究テーマも変えさせられるかもしれないな。

高見 そうだろうな。だから知らせにきたんだ。

久作 ———— まだまだ時間が欲しいんだが——— 高見が言うように、無駄なあがきなのかもしれないな———

高見 随分、疲れてるじゃないか。徹夜だのなんなの続けてると、診療の方で、ポカをやりかねんぞ。

久作 ———— そんなことには、絶対にしない。

高見 俺なら、いい加減にやめとくけどな。

久作 俺は俺だ。

高見 まあそうだ。俺には他人事だ。

久作

———
そこへ、より子が入ってくる。

より子 失礼します。

高見 あ、より子ちゃん、まだいたんだ。俺、今夜当直なんだけど、一緒に呑まない？
より子 (とがめるように) 高見先生。

高見

大丈夫、医療用アルコールの水割りにするから——呑んだことないけど。呑めるのかしら、あれって。

より子

存じませんわ。

高見

「存じませんわ」だって、いいなあその言葉づかい。東京風だね。

より子

私、荻野先生にお話があつて来たんです。

高見

あら。

久作

何でしょうか。

より子

荻野先生だけに聞いて頂きたいんです。

高見

皆が俺を邪魔にするんだもんなあ。

久作

悪いな、高見。

高見

失礼するよ。(より子に) じゃあ、話がすんだら、俺とつきあつてちようだいね。あのね、患者さんから貰った松茸があるのよ。

より子

お断りしますわ。

高見

なんでよ。松茸よ。

より子

私はナースです。患者さんの看護が仕事です。高見先生のお話のお相手をするのが仕事ではありませんので、あしからず。

高見

俺のお相手をするのは、医学への貢献でしょう。ここで、より子ちゃんにふられるとする。明日の手術の時に「ああ、よりちゃんにふられちゃったなあ」ということ

を思い出してイライラする。すると手元が狂って、患者の心臓にメスがグサツ、なんてことにもなりかねない。

久作 おいおい。

高見 俺はやるよ。じゃあ、当直室で待つてるからね、より子ちゃん。

より子 お疲れ様でした。

高見 全然、疲れてないって。荻野、幸運と成功を祈ってるよ。

久作 ——ありがとう。

高見 失敬。

高見、出ていく。

久作 ——話というのは？

より子 先生の患者さんへの虐待について、私、怒りを感じています。

久作 虐待ですって？

より子 今の手術の時もでした。

久作 私が何をしました？

より子 先生は卵巣をご覧になりました。子宮筋腫では、卵巣は関係ない筈ですが。

久作 そうです。しかし——

より子 先生は、排卵についての研究をしていらっしやいます。だから、卵巣の観察は、先生には必要なことでしょう。でも、患者さんには必要ありません。患者さんたちは、先生の利己主義な欲望のための犠牲になっていくんです。

久作 それで、私の研究のみならず、やがて医学が進んでいくのです。それに卵巣を観察したからといって、患者さんには何の身体的負担もかけていません。

より子 先生は、女性を同じ人間だと認めてはいないんです。実験動物か何かだと思ってるんですわ。

久作 津島さん！

より子 先生の研究は女性のためのもではないんですか。女性の幸せを考えるのが先生の義務ではないんですか。

久作 私は、患者さんたちのことを考えています。

より子 そうでしょうか。

久作 私は医者ですよ。

より子 先生はご自分の研究が第一なんじゃないですか？

久作 ?!

より子 早く博士号を取って、学者としての名声を得たい。それが第一なんじゃないんですか？ 博士号が取れさえすれば、診療医をやめて、研究に専念できると思ってるんじゃないですか。

久作 そんな――

より子 そのために女性を利用するなんて許せません。

久作 ――私の研究が完成すれば、多くの女性たちを救うことができます。排卵の時期が判れば、もしかすると、おハナさんも身ごもることができるともしれません。墮胎という方法をとる以前に、望まない妊娠をなくすことができるかもしれないです。

より子 ――では、女性を冒険しない研究方法を考えて頂きたいです。

久作

より子 それだけです。失礼します。

より子、出ていく

久作、ちよつと考え込むが、ノートを取り出す

久作 ――いや、これはただのエゴではない。無謀なことでもない。断じて違う――

久作、迷いを振り払おうとするように、ノートに猛然と書き始める。

久作 (書きながら) ――婦人にいつ受胎が起こるかは、今なお未解決の問題である。受

胎期の問題は、医学始まって以来、錯誤の軌道を滑走し、今世紀に至りて医学の進歩と共に妊娠の成立の基礎的事項はますますせんめい闡明せられつつあるに反し、排卵の時期に関する見解のみは、只、矛盾と混乱に終始し、最近に至るも、いまだ迷宮を彷徨しつつある――

そこまで書いて、ノートを見直す。

久作

最近に至るも、いまだ迷宮を彷徨しつつある――結論はどこにあるんだ。一体、何をすればいいんだ――

考え込む久作。

そこへ再び、より子が飛び込んで来る。

より子

先生！ 荻野先生！

久作

(いらだちを隠せず)――今度はなんですか――

より子

急患です。おキヨさんが――

久作

おキヨさんが?!

担架に乗せられたキヨが半三郎に付き添われて運ばれて来る。

キヨは妊娠六、七ヶ月。ぐったりと横たわっている。

半三郎 先生！ おキヨさんが――

久作 どうしました？！

半三郎 今、運び込まれてきて――

久作 症状は？！

半三郎 腹痛と嘔吐、それに激しい目眩がするそうです。

久作 意識は？！

半三郎 ありません。

久作 あちらへ。

キヨを治療室に運びこもうとする。

その時、ぐったりしていたキヨが、必死に手を伸ばして久作の腕を掴む。

久作 おキヨさん？！

キヨ

キヨ、重症とは思えないような力で久作の腕を握って放さない。

キヨ 先生——助けてくんなせ——

久作 勿論です。

キヨ 先生、おら、死ぬ訳にやいかねんですて——

久作 大丈夫です。

キヨ 助けてくんなせ——

久作

久作、合図。キヨ、治療室に運び込まれる。

そこへ、妊娠五ヶ月程度のお腹をしたとめ、弁当を持ってやってくる。

治療室の慌ただしい様子に気づく。

治療室からは久作たちの声が聞こえてくる。

久作 強心剤と昇圧剤を。

より子 はい。

久作 痙攣が起きてる。気道確保。

半三郎 先生、意識が——

久作 判ってる。

半三郎 先生！ 先生！！

久作 おキヨさん！！

半三郎 おキヨさん！！

より子 おキヨさん！！

半三郎 —— おキヨさん。

間。

治療室の方を見たまま、動けないでいるとめ。

呆然とした久作が、治療室から現れる。

がつくりと椅子に崩れ落ちる。

とめ

暗転。

第二幕

第一場 春

明けて、翌年の春。

診療が終わった夕方。

久作はいない。

半三郎とより子が、片づけなどしている。

何となく、重苦しい雰囲気。

半三郎 ——— もう、今日は帰っていいと思いますよ。

より子 ——— はい。

半三郎、ため息をついて座り込んでしまう。

より子、久作の机の上を整理していて、ふと研究ノートを取る。

ノートの上に薄く埃が溜まっている。

より子、それを払って、ノートをじっと見つめる。

より子 あの、古井先生——荻野先生のことなんですけど——

半三郎 ——（聞こえてはいない）

より子 先生が研究に手をつけようとなさらないのは、私が先生に申し上げたこともあるんじゃないか——でも、私が言いたかったのは——

半三郎 （聞いていなかった）え？ 何か言いましたか？

より子 いえ、いいんです——失礼します。

より子、待合室から廊下に出ようとする。

そこへ、高見、桜餅の包みを片手にやってくる。

高見 あら、よりちゃん、お帰り？ 患者さんから貰った桜餅があるんだけど、おひとつ

いかが？

より子 結構です。失礼します。

高見 僕が来るといつもすぐいなくなっちゃうんだけど、気のせい？

より子　いいえ、気のせいじゃありません。——高見先生。

高見　なーにー。

より子　白衣の前はきちんと留めて下さいませ！

高見　はーい。

より子　失礼します。

高見　じゃあねー。

より子、去っていく。

高見、診察室に入っていく。

高見　よ、アーメン君、どうしてる？

半三郎　僕は相変わらずですけど——

高見　荻野のことか？

半三郎　そうなんですよ。高見先生。荻野先生が変なんですよ。

高見　そうだよなあ。桜餅、おひとついかが？

半三郎　研究の方には、少しも手をつけようとなさらないし、診療も心ここにあらずといった風情で。昨日なんか子宮後屈の手術があったんですけど、いつもみたいに卵巣を観察しようともなさらないんです。どうしたらいいんでしょう。

高見　　そういう時はほっとくしかないんだよ。

半三郎　高見先生、冷たいですね。

高見　　クールなドクターだからね。診療をしながら、研究をしようなんて所詮無理な話なんだよ。だけど、無理を承知でやってくれる奴がいなくなると、面白くないよな。

半三郎　面白いとか面白くないとか、そういう軽薄な話じゃないんです！

そこへ、とめ、弁当の包みを持って診察室に入ってくる。

とめ　　失礼します。

半三郎　あ、奥様。

とめ　　——あの、荻野は——

半三郎　さっき、散歩でもしてくると言って、出ていかれて——

とめ　　——そうですか。

高見　　奥さん。久子ちゃんは健やかですか？

とめ　　おかげ様で、首も座りまして——でも、主人の方が——どうしたのか。

半三郎　奥様、先生は必ず偉大な研究をやり遂げられる方ですよ。

とめ　　——

そこへ、久作、庭の方から、ぶらぶら戻ってくる。

久作、白衣を着ていない。

三人がいるのに気づいて、

久作 おや、どうしたんです。珍しい顔ぶれですね。

とめ あの、あなた、お夕食を持って参りました。

久作 いらなと言ったでしょう。やることもないんだ。早々に家に帰りますよ。

半三郎 先生――

高見 どうしたんだ、荻野？

久作 別にどうもしません。

高見 研究を完成させるためには、寸暇を惜しんでやらなきゃいかんのじゃないか？

久作 研究か――高見、君の言う通りだ。町医者風情が新学説を発見するなんてできるわけはないんだ。そんなことはドイツの大学者にでも任せておけばいい。

高見 それでもやり方はいくらでもあるんじゃないか？

久作 そうかも知れん。だが、私には無理だ。

半三郎 先生。

久作 誰にも解けない謎を解くなんて、私にはきつと過ぎた望みなんです。そんな馬鹿なことにかまけているから、患者さんを助けることさえできない。患者さんを助けら

れなくて、何が女性たちを救うための研究ですか。高見、君が正しい。私は君のよ
うな医者にならなくてはいけないと思うんだ。

高見 — 俺のような医者だって？

久作 — ああ、そうだ。

高見 そりゃあ、いい所に気がついた。やっと、目が覚めたというわけだな。

久作 — そうだな。

高見 やめたまえ、やめたまえ。そんな研究なんぞやめてしまおうが正解だ。

久作 — そうしようと思う。

半三郎 先生は、先生はそんな方じゃありません！

久作 じゃあ、私はどんな方だというんですか。

高見 全てをかけてやっていた研究を簡単に投げ出すような方だよ。

久作

半三郎 高見先生！

やめるのは大いに結構だ。だがな、荻野、だからと言って俺のような医者に簡単になれると思つたら、大きな間違いだ。君のようないい加減な料簡で俺のような立派な医者になれるわけがない。

久作

高見 どうせなら、全部やめるが正解だ。俺は確かに優秀な医者だ。が、君なんぞに目標

にされたくはないな。非常に不愉快だ。

久作

高見

失敬するよ。

高見、出ていく。

久作

(とめに) じゃあ、帰りましようか。

とめ

あなた、研究をやめるといふのは、本当ですか？

久作

——すまないが、私には無理なんです。

とめ

あなた(言葉にしていいか迷うが)あなたがおキヨさんを死なせたわけじゃあない
がです。

久作

半三郎

そうです。おキヨさんはいいい人だったから、神様が少しだけ早くお側に召されただけ
けなんです。僕は——僕は、そう思っています——

とめ

研究が完成すれば、多くの女性たちを救うことができる。あなたはそう仰っていた
がじゃないですか。私もそう信じています。

久作

——しかし、おキヨさんには間に合わなかつた。

とめ

じゃあ、次のおキヨさんには間に合うように、急がなければいけないがじゃないで

すか——お夕食を持つてきました。私は、こんげなことくらいしかできません。だから——

とめ、夜食の弁当の包みを解く。

とめ 食べて下さい。腹が減っては戦いくさができませんから。——あ、私、卵焼きを作ったの

に忘れて来てしまいました。新しい見事な卵を頂いたんです。数が無かったので、お義母様たちには内緒にして、あなたの分だけ作ったのに——すぐ、持つてきますから、その間に少しでも——あの、すぐ戻って来ますから——

とめ、出ていく。

久作

——これで、家に逃げ帰ることもできなくなりました——

半三郎

先生——

その時、ハナがそつと診察室を覗き込む。

ハナ

あのう、すみません。

半三郎 おハナさん。

ハナ あの、診療はもう終わりなしたですよね。

半三郎 はあ、でも——

久作 何かあるんですしたら、結構ですよ。

ハナ そうですか。すみませんです。ちゃんとした時間に伺わんけりゃいけねとは思った

んですども「面倒みる子供もないんだすけ、その分働いて貰わんきゃ」って。それで来れなくて。

半三郎 どうぞどうぞ。

ハナ はい。

ハナ、診察室に入って来て、包みを差し出し、

ハナ 先生、これ、家で拵こぎえました桜餅でございますども、どうぞ。

久作が受け取ろうとしないので、半三郎、慌てて受け取って、

半三郎 ありがとうございます。頂きます。

久作 (ようやく気を取り直して)——どうですか、調子は。痛んだり、不正出血があつ

たりはしないですか？

ハナ はい、それは随分と宜しいようです。

久作 じゃあ、今日は？

ハナ あの——手術で子宮を取りましたですね。

久作 子宮は取ってないですよ。取ったのは、筋腫です。

ハナ ——それで、私、赤ん坊はできますでしょうか。欲しいがです。私、どうしても赤ん坊が欲しいがです。

久作 おハナさんは、子宮後屈もないし、ご主人のも、その、元気ですし。

ハナ はい、お父^とちゃんは随分と達者です。

半三郎 私も見ました。元気よく泳いでましたよ。

ハナ はて、お父^とちゃんはどこで泳いでましたですか？「おら、かなづちだ」って私には言っておりましたども。

半三郎 いや、つまりご主人の——精子がです。

ハナ はあ、セイシがですか、泳いでますですか。お父^とちゃんは泳げませんが、その方は泳いでますか。

久作 つまりね、お父ちゃんの精子という目に見えないくらいのものが、おハナさんのお腹の卵子に泳いで行くわけです。それで、卵子と精子が結合して、赤ん坊になるわけなんですよ。

ハナ はあはあ、判りますです。じゃあ、お父^とちゃんのセイシは五体満足がですね。

久作 そうなんです。

ハナ じゃあ、やっぱ私が——いけねんでしうか。

久作 おハナさんにも異常はないと思うんです。妊娠できないことはない筈なんですが。

ハナ (必死に) では、どうか先生、私らに子宝を恵んでくんなんしょ。子授け神社にも、お寺にも願掛けに行きました。行者さまに御祓いもして頂きました。お守りも御札も頂きました。でも、駄目なんです。お義母^かさんは、あんまりあちこちに頼むすけ、神様同士が喧嘩をなさってるんだ。おまえが、早合点なことをするからだ。何てとんまな嫁だろうって。

久作 おハナさんは断じてとんまなどではないです。まだ、手術して半年です。もう少し様子を見た方がいいでしょう。

ハナ はい——(しょんぼり)

半三郎 (心から同情して) 辛いでしうけど——

ハナ (取り乱した自分に気づき、明るくふるまおうとするが、以前のようにはいまうかない) そんげに辛いこともないがです。お義母^かさんは「この嫁は見かけ倒しだったなあ」なんて言ったりしますども、お父^とちゃんが「何言ってるんだ。お袋は見かけもなんも全部倒れてるでねえか」なんて言い返してくれますし。優しい旦那さんで、良かったですな。

半三郎

ハナ ——でも、そのお父ちゃんも——「へえ、やるだけんことはやった。どうしたらいいんだか判らねえ」なんてため息つくようになって。だから、私がなんとかしねえ

とど思つて——

久作 そうですなえ。

ハナ (真摯に) あの、先生——学問の方はおできになったがですか？

久作 ——私も、どうしたらいいのか少しも判らなくなつてしまつて——

早くおできになればと願つてますいね。先生、私かお話しすることが役に立つがでしたら、何でも聞いて下せえ。

久作

半三郎 そうだ、先生、おハナさんの手術の時、仰つてたじゃないですか。新鮮な黄体ができていた。排卵があつたすぐ後だ。この分なら、十七日以内に月経がある筈だつて。

久作

半三郎 (久作が黙っているの) おハナさん、伺いたいことがあるんですが。

ハナ はい!

半三郎 手術が終わつたあとどれくらいして、月のものがありましたか？

ハナ 月のものですね——月のもの、手術が終わつてから、ですね。

半三郎 手術が終わつてから十七日以内にあつた筈なんです。

ハナ 手術をしたのが——

半三郎 十一月の二十日ですな。

ハナ そのあと——十二月の初め頃だと思つたども。

半三郎 はつきり、日にちを思い出して貰いたいです。無理ですか。

ハナ 随分前になりますすけ。

半三郎 何日か思い出せませんか。

ハナ うーん——うーん——（必死で思い出そうとする）

半三郎 頑張れ、気張れ、おハナさん！（必死で応援する）

ハナ ——駄目です。忘れてしまいました。ほんに私の学がないばかりに、お役に立てなくて。

半三郎 いいんですよ。

ハナ 他にお役に立てることはいいですかね、先生。私は子宝を授かる。先生は偉い博上様になる。一緒に頑張らましょいね！

半三郎 先生！

半三郎、ハナ、熱意を込めた目で久作を見つめる。

久作

——おハナさん、ありがとう——じゃあ、入院する前に、おハナさんは、いつお父ちゃんと仲良くしましたか？

ハナ (得意になつて) それらば、覚えてます。手術をして頂くことが決まってるからして
ませんです。

久作 —— そうですか。

ハナ はい。実は手術の前の晩にお父^とちゃんが、「しばらく、我慢しなきゃいけねえすけ、
頼む」つて言つてきたんだども、手術が終わつてからつて言つてやりました。それ
に、その日はちようど腹が痛くなる日だったもんで。

半三郎 —— ちようど、腹が痛くなる日？

ハナ はい、私、月のものが来る二週間前になると、決まって腹が痛むがですよ。

半三郎 —— (久作に) それは排卵痛ですね。

ハナ ハイランツ？ それを患うと死にますですか？

半三郎 いえ、排卵痛というのは、排卵の時に起こる痛みで、日本人には滅多に——

久作 (遮つて) おハナさん、今、なんて言つたかな。

ハナ それを患うと——

久作 (鋭く) そうじゃない。——いつ、決まって腹が痛むつて？

ハナ ですから、月のものが来る二週間前になると、決まって腹が痛むかで、その時は、
体にさわると思つてお父^とちゃんとは何もしねようにしてますども。

久作 —— (目つきが変わつている)

ハナ 先生、どうかしましたけ？

久作

——腹が痛むのは、次に来る月経の二週間前なんですかね？

ハナ

（久作の気迫に怯えて）はい。いけなかったでしょうか。

久作

前回の月経からじゃなく、次に来る予定の月経から逆に数えて二週間前なん

す

ね?!（ハナに詰め寄る）

ハナ

はい——どうもすみません！

久作

——そうか。

半三郎

——先生？

久作

——そうか。——そうかそうかそうか!!

半三郎

どうしたんです？

久作

判ったぞ！ 排卵の時期が判った!!

半三郎

なんですって？

久作

——排卵の時期は、月経が始まった日から、数えるべきではなかったんだ！ 次に

来るべき予定の月経から逆算すべきなんだ！ おハナさんが言うように「決まって

月のものが来る二週間前」なんですよ!! そうだ、なぜ、そのことに気づかなかつ

た——

半三郎

先生——

ハナ

先生？

久作

おハナさん！

ハナ はい！

久作 （ハナの手を取って）ありがとうございます、ありがとうございます！

ハナ ——はい？

久作 おハナさん、子宝が授かりますよ。

ハナ え？——本当ですか？

久作 そのお腹が痛くなった日に、お父ちゃんと仲良くするんです。そうすれば、必ず子宝が授かります！

ハナ 子宝が授かるがですか？

久作 排卵のちょうどその日に何もしてないんだ。子宮筋腫がなくなつたって、妊娠するわけがなかったんですよ。いいですか。その日に仲良くするんです。そうすれば身ごもります。

ハナ 本当ですか、先生。本当ですか？！

久作 うん。

ハナ 判りました。頑張ってみます。仲良くしてみます。先生、ありがとうございます！

久作 こちらこそ、ありがとうございます。

ハナ お父ちゃんに知らせます！

ハナ、ひたすら、お礼とお辞儀を繰り返しながら、転がるように走り去っていく。

久作も興奮しきっている。

半三郎はまだよく訳が判っていない。

久作 古井くん、これは凄いよ。凄いヒントが見つかりましたよ！

半三郎 どういうことなんですか、先生。

久作 おハナさんの言っていた腹痛は、古井くんが言ったように排卵痛です。つまり排卵の時に起こる痛みです。

半三郎 日本人にはあまりみられないといいますが、おハナさんには、それがあつたんですね。

久作 問題は、排卵痛が起こる時期です。おハナさんは、なんて言っていましたか？

半三郎 えーと、——月のものが始まる二週間前って。

久作 そうだ。ドイツのシュレーダー学説では、排卵はいつ起こると言っていましたか？

半三郎 ——排卵は月経開始後十四日から十六日の間に起こると。

久作 ドイツ医学界の大学者がご託宣を下せば、皆がそれに右へならえだ。しかし、良く考えてみて下さい。月経というのは受精卵が起こらなかつた結果として起こる現象じゃないか。

半三郎　そうです。だとしたら――

久作　だとしたら、月経の開始から次の排卵を算出するのはナンセンスです。排卵やこれに続く黄体によって影響を受けるのは、次に来るべき月経じゃないんですか？　それなら、奇しくもおハナさんの言ったように、排卵は次回月経から逆算すべきじゃないですか！

半三郎　月のものが始まる二週間前――

久作　そうだ、次の月経が始まる二週間前です。そして（机の引出しを開けて記録を取り出す）私が手術の時に黄体を観察してきたこの記録では、排卵のあとにできる黄体が見られると、十七日以内に次の月経が起こっている！（記録を机の上に叩きつけるように置く）もしかすると、もしかするとこれで排卵の時期が特定できますよ！

半三郎　先生、これは――これは大変な発見じゃないですか？！
久作　――おハナさんが助けてくれた。私の研究を助けてくれたのは、教授でもない。最新の設備でもない。患者のおハナさんです。

半三郎　そうです!! 先生、おめでとうございます!!
久作　いや、落ちついて下さい。まだです。まだ、確かめられたわけじゃない。症例を調べてみなければ。

半三郎　そうですね、そうです。それを実証しなければならぬ。

久作　古井くん、確かドイツの産婦人科学会誌に排卵痛のことを書いた論文が載っていた

ね。

半三郎 えーと、確か――

久作 ツイルデバーンだ！ ツイルデバーンの論文だ！ 探しましょう。

半三郎 はい！

二人、論文を探す。

高見、久作に詫びようと思つてやつてくる。

が、診察室の二人の様子が違うので、部屋の外に立ち止まる。

半三郎 先生、ありました！（論文の載った雑誌を出す）

久作 ようし！

半三郎 （開いて）ツイルデバーンの論文です。

久作 ドイツのある婦人の月経と排卵痛の記録だ。一年八ヶ月、二十回の月経の記録だ。

これでとりあえず確かめてみましょう。

半三郎 月経周期は最短二十四日、最長三十六日。一定してませんね。

久作 排卵痛の時期は、月経開始後――十四日から――二十二日か、やはり月経開始から

数えていくと一定ではない。法則性は見られない。

半三郎 じゃあ、先生。

久作 うん、次の月経から、逆算してみよう。

半三郎 はい。

久作 これは、十四日。次は——十二日。

半三郎 次は、十五日。十四日。その次は十六日。

久作 そして、十四日。十四日。十五日——

半三郎 次は十三日。十四日。十四日——先生。

久作 ——なんてことだ。この婦人は月経周期は二十四日から三十六日と、こんなにバラつきがある。それなのに、次回月経から排卵日を逆算してみると、月経周期が長い月でも短い月でも——

半三郎 ——ほとんど同じです！

久作 十四日前後。十二日から十六日の間です。

間。

半三郎 先生！ これは、これは本物ですよ。どうしよう。本物の大発見だ！

久作 待て、待て待て！ 慌てるな！ 落ちついて。まだ、これが日本の婦人にもあてはまるかどうかは判らないんです。

久作、そう言いながら、引出しを開ける。

が、目当てのものはそこにない。

慌てふためいてあたりを探し回る。

久作 ない。ないぞ！ 知らんかね。古井くん、どこにあるのかな。

半三郎 何がですか、先生。

久作 決まってるじゃないですか。うちの患者の黄体と月経の記録ですよ。いつもこの引出しに入れているのに。

半三郎 さっき、先生がご自分で出して、机の上に置かれたじゃないですか。

久作 (机の上を見て) これだ！ これだよ!! さあ、調べるぞ。古井くん、手伝ってくれたまえ。

半三郎 はい(計算するためのメモの用意をして)

久作 患者、宮田タキ、四十四歳、未産婦。月経周期二十八日。子宮頸部筋腫、手術、八月十八日。黄体所見、血管新生期初期!

半三郎 つまり、排卵直後ということですね。

久作 そうだ。次回月経開始、九月二日。

半三郎 十五日後です。

久作 これは、黄体所見、開花期の終わり。月経直前か。(ページをめくって) 川口リツ、

卵巢囊腫のうしゅ、手術八月二十一日。黄体所見、血管新生期初期。排卵直後だ！ 次回月経、九月三日。

半三郎 十三日後です——先生。

久作 ——手分けして調べましょう。

半三郎 はい。

二人、資料を分けて、それぞれに計算する。

問。

待合室の高見、誰に言うともなく呟くように、

高見 ——まあ、せいぜい頑張ってくれたまえ。

高見、待合室からそつと出ていく。

久作 どうですか、古井くん。

半三郎 はい。排卵日と思われる日から次回月経までが、こちらでは、十五日。十四日。十四日。十五日。十六日。十六日。十四日です。

久作 こっちは、十六日。十五日。十四日。十二日。十四日。十四日。十四日だ。

半三郎 —— 先生 ——

久作 —— 古井くん ——

半三郎 やった。やりましたね。先生！

久作 やった。やりましたよ。古井くん！

半三郎 先生！！

久作 古井くん！！

二人 ばんざーい！！ ばんざーい！！ ばんざーい！！

狂喜乱舞の久作と半三郎。

そこへ、とめ、玉子焼きを持って、診察室に戻って来る。

とめ あの ——

久作 ああ、いいところに来てくれました。

とめ どうしたんです？

半三郎 先生が遂にやっただけですよ！

とめ え？

久作 とうとう謎が解けたんです。婦人の排卵日の謎が解けたんだ！

とめ —— そうなんですか？

半三郎 そうなんですよ！

久作 今まで、数えきれないくらいの学説があった。でも、そのどれもが月経が始まってからの日数を数えている。次回の月経から逆算した者はいなかったんだ。こんな簡単なことに、世界の大学者の誰も気づかなかったんだから、お笑いだよ。わはははは。

半三郎 わはははは。

とめ ——それは、おめでとうございます。

半三郎 こんな世紀の大発見の現場に立ち会えるなんて、滅多にない幸せです。先生、ありがとうございます！！

久作 古井くん、まだ早いですよ。これを確実に実証しなくては論文にはなりません。どうやって実証したらいいんでしょうか。

久作 それをこれから考えます。古井くん、今日はもう結構ですよ。一人でじっくり考え直してみます。

半三郎 判りました。今日のところはこの発見への感謝と先生の論文の完成を神に祈っていることにします。

久作 ありがとうございます。

半三郎 お疲れ様でした。

とめ お疲れ様です。

半三郎 (とめに) 失礼します。

半三郎、出ていく。

とめ あの——(お弁当)

久作 ああ、腹が減っては戦ができませんよね。

久作、さっそく食べ始める。

しかし、資料から、目を離せない。

とめ あの、そんげに大変なことが判ったがでしたら、もう必要はないかもしれないがですが——これ。

とめ、月経カレンダーを出す。

久作、それを受け取って、

久作 いや、必要になるのは、これからです。

久作、カレンダーをじっと見る。

とめは、診察室の中を片づけたりしている。

久作 この前の月経は——そうか、ここだったか。

久作、とめの以前のカレンダーを取り出す。

久作 えーっと、月経周期は二十八日から三十三日。平均は二十九日か。すると、排卵日は——

とめ、一息ついて椅子に腰掛ける。

久作、とめをじっと見つめる。

とめ ——何ですか？

久作 (静かに) 論文で新しい学説を発表する時は、その学説を充分に裏付ける証拠が必要なんです。判りますか？

とめ ——ぼんやりと。

久作 今新しく発見したこの理論も、真実だという証拠をつくらなくては論文にはできな

いんです。

はい。

久作

精子というものは女性の体に入ると、三日位しか生存していません。ですから、排卵日の五、六日前までなら交わっても妊娠はしないと考えられるんです。

とめ

——そうですか（何か嫌な予感がする）

久作

これを実地に試したいんです。

とめ

——あのおう、どなたが試すんです？（すごく嫌な予感がする）

久作

私とあなたです。あなたの体で、私が実地に試すんです。

とめ

——（的中）

久作

これから毎月一回決まった日に、私たちは媾合をします。排卵日と思われる日を計算して、その五、六日前にです。それで妊娠しなければ、私の理論が正しいというひとつの証拠になります。そして、その経過を全て論文に載せるんです。

とめ

——それはつまり、私達夫婦の——「ペけ」のことを——論文に書くって——そういうことですか？

久作

研究のため、学問のためです。

とめ

——それは、破廉恥ではないですか？——第一、お義母様が、それを見たら、私はなんて言われるか——

久作

大丈夫。お義母さんはそんなとこまで、読みやあしません。

とめ ですけど——ですけど——ご近所の——

久作 ご近所の皆さんは論文を読んだりほしくない。

とめ ですけど、ですけど——あなただって、お医者様のお仲間、荻野は夫婦の秘事を

論文に書いて博士になったなんて言われたら。

久作 構いません。

とめ

久作 お願いです。どうか協力して下さい。

とめ ——それで、研究が、論文が、完成するがですね。

久作 それがなければ完成はしないんです。

とめ ——それが、あなたの研究のために私ができることなんです。

久作 そうです。そして、この世であなたにしかできないことなんです。

とめ (必死の思いで決心して) ——やらせて頂きます。

久作 ありがとうございます!

とめ ——それで、それはいつ行われるのですか?

久作 今夜です。

とめ 今夜?

久作 計算してみたら、今夜は、排卵日から数えて六日前に当たります。今月の実験は今夜に限るんです!

とめ あの一——ちよつと心の準備が——来月ではいけませんか？ 排卵日なら来月でもあ
るがでしよう？

久作 確かにあります。だが、実験を一月延ひとつきばせば、論文のでき上がりも一月遅ひとつきれるんで
す。そんな時間の無駄をしてなるものですか。

とめ ——判りました。

久作 ありがとうございます。ようし、今夜はペけ印ですよ！

とめ ——ペけ印ですか。

久作 今日はこれで帰りましょう。大切な仕事があるんですから。

とめ ——はい。

久作 待ってて下さい。すぐ支度してきます。

久作、ウキウキしながら出ていく。

戸惑っている、とめ。

暗転。

暗転中、久作が日記を読む声が聞こえる。

久作（声） 「六月二十一日。とめ、来潮。実験の第一段階は成功せり。論文の完成は年末まで

に、と予定し、川村教授にもその旨を伝える。

六月二十六日。初めて久子に湯を使わせてみる。湯の中に落とさんかと、恐怖せるも、とめは、案外呑気にて、笑って見ている。赤ん坊に湯を使わせることは、生涯二度とすまいと思う。恐ろしきものなり。

七月一日。婦人の排卵日を特定するための実験続く。そろそろ、最後の実証に着手せんと決意。今回の実験もとめの協力は不可欠なり。とめに何時いつ相談したものと

第二場 夏

同じ年の夏。

蝉せみしぐれ時雨が聞こえている。

昼休みの少し前。

診察室には久作と半三郎とより子、そしてハナ。

ハナの診療中である。

ハナ 先生、本当ですか?!

久作 間違いありません。おめでたです!

ハナ ありがとうございます!

久作 おめでとうございます。

半三郎 おハナさん、本当に、本当におめでとうございます!

ハナ 先生の仰った通りにしたんですいね。腹が痛くなる日を待って、その日にしたんで

すいね。ほかの日はお父^とちゃんがなんて言っても、何もしねえで、無駄打ちしねえで、その日に頑張ってみたんです——そしたら、そしたら——

久作 ——うん、うん、良かったですね。

ハナ 月のもんがのうなったって言ったんすいね。お父^とちゃんは「前のこともあるすけ、また間違いかもしれねえ」って信じなくて、そしたら、ご飯をよそおうとしたら、急に気持ちが悪くなって、それでこれが悪阻に違えねえって思っ、気持ち悪かったんだども嬉しゅうて嬉しゅうて。お義母^かさんは「今日から何もしねえでいい。全部おらがする」って。

久作 あ、でも、何もしないのも却ってよくありませんよ。適度に運動して下さいね。テキドですか。テキドというのはどんな運動でしょうか。

ハナ そうですね。家事は無理をしない程度にやって、それから、お父ちゃんと二人で、毎日ゆっくり散歩でもして下さい。

ハナ 散歩ですか。二人で歩いたことなんてあんまりないですすけ、お父^とちゃん照れるかもしねえです。

久作 赤ちゃんのためだって、一言ったらいいんです。

ハナ はい——この腹ん中に、赤ん坊がいるがですね。

久作 まだ、身長は一寸足らず、体重は一^{もんめ}匁^めってとこですね。

ハナ ちっせえですね。すげえちっせえですね。

久作 ちっせえです。でも、ちゃんと人間です。顔も手足もあります。

ハナ はい。

久作 大事にして下さい。

ハナ ありがとうございます。お父^とちゃんは、病院ではつきりするまで、信じないって言ってたんですけども、帰って「できたんだ」って話します。先生の仰る通りにしたら、子宝が授かりましたです。先生のお蔭です。ありがとうございます。

久作 私の研究も、おハナさんのおかげで飛躍的に進展したんです。お礼を言いたいのは、私の方です。

ハナ そんな、勿体ない。

久作 じゃあ、これから体を大事にして、元気な赤ちゃんを産みましょうね、おハナさん。

ハナ はい。

久作 今日は結構ですよ。

ハナ はい、ありがとうございます。

ハナ、深々とお辞儀をして出ていく。

半三郎 ほんと、良かったです。やっぱり神様は見ていて下さるんですね。そして、先生の

お力です。

久作 —— 次の方は？

より子 午前中はこれで終わりです。

久作 じゃあ、お昼にしましょう。

より子 —— 先生、ちょっとお話ししたいことがあるんですが。

半三郎 津島さん、先生の研究は今大切な時なんです。昼休みくらい先生を自由にしてあげ

てもいいんじゃないですか。

より子 —— 判りました。失礼します。

より子は出ていく。

久作は論文の資料やノートを広げ始める。

半三郎 先生、あと少しですな。

久作 最後の大事な事が残っています。あと一つ確かめたいことがあるんです。

半三郎 それは何ですか？

久作 あ、いや——とにかくここまで来たんです。必ずやり遂げてみせます。

半三郎 はい——では、僕もお昼を頂いてきます。

半三郎、一礼して出ていく。

とめ、待合室に入ってくる。

半三郎、とめに一礼して去っていく。

久作、熱心に論文の草稿を書いていく。

とめ、久作の弁当を持って入ってくる。

とめ　あなた、お昼をお持ちしました。

久作　ああ、ありがとう。

とめ、弁当の包みを開いて渡す。

久作　——久子の風邪はどうですか。

とめ　随分、良くなりました。だから、お義母様に頼んで出て来れたがです。

久作　そうですか。

とめ　久子はとっても賢いがですよ。あなたは、夜遅くにしかお帰りになれないから、寝顔しかご存じないでしょうけど、私に向かって何か喋りかけようとしますがです。絶対話したいことがあるがです。

久作　まだ、久子に手が掛かるから、考えられないかもしれませんが——その——もう一人くらい子供がいてもいいかと思うのですが、どうですか？

とめ 勿論です。何人いてもいいがじゃないかと思えてきました。初めの頃は泣いてばかりいるし、どうしていいか判らないし、一人で沢山だつて正直思っていたんですけど——近頃は——可愛くて。

久作 そうですか！ では、作りましょう。もう一人、作りましょう。

とめ そうですねえ（幸せである）

久作 ——ところで、論文のことなんですが、近いうちに仕上げたいと思っています。

とめ 頑張つて頂きたいと思つてます。

久作 ですが、一番重要なことをまだ確かめていないんです。

とめ 一番重要なこと——ですか？

久作 婦人の排卵はいつあるのか。それを突き止めようというのが、私の論文です。

とめ ——はい。

久作 「婦人の排卵は次回予定月経の十二日から十六日前である」というのが私の説です。論文にするためには、それを実証しなくてはなりません。

とめ それは、あの——私たちが——

久作 そうです。今まで、私たちは排卵日を避けて、毎月、その——交わつて来たわけです。そして、見事妊娠してはいけません。

とめ ——そうですよね。

久作 が、それだけでは十分ではないんです。その実験では「この時期は排卵日ではな

い」ということが判るだけなんです。次には「この時期が排卵日である」ということを実証しなければならぬんです。

とめ — それは —

久作 判りますよ。排卵日に構合すれば受胎することができると。つまり、妊娠することが確かめられてこそ、排卵日が確かめられるんです。それです——計算したところ、今日はちょうどあなたの排卵日にあたる日なんです。ついては——ついては、です。

とめ

久作 ついては、今夜構合して欲しいんです。そして、妊娠して欲しいんです。

とめ — 妊娠するがですか？ 私が——

久作 そうです。それで、私の仮説は完全に実証されるんです。論文は完成するんです。婦人の排卵期の謎が解明されることになるんです。

とめ

久作 逆に言うとそれがなければ、私の説は不完全だということになります。論文にはできないうんです——どうでしょう。協力して貰いたいです。お願いします。

とめ

久作 — どうしたんですか？

とめ — 私は嫌です。

久作 え？

そんなのは、嫌です。

久作 嫌ですって——なぜです？

絶対に嫌です。あなたの論文のためであっても、それは嫌です。お断りします。

久作 どうしてですか？ 子供は何人いてもいいって——

とめ そうですが——ですが——

久作 どうしたんです。

とめ うまくは言えませんが——

久作 ちゃんと説明して下さい。そうでなければ困るんです。ここまで来て論文ができないことになるんです！

とめ ——私、子供というのは天から授かるものだと思っています。

久作 ——？

——だから、私——怖いです。

とめ 怖い？ 何がです？

あなたが研究して突き止めたことは、正しいのだと思います。だから、今夜媾合をすれば、私は身ごもることになるんだと思います。

久作 そうです。そうなります。そうならなければ困るんです！

とめ ——それが、怖いんです——

久作 なぜです？

とめ ——それは——人の勝手に人を作ったことには、ならないでしょうか。

久作 ——人を作る？

とめ 私、子供というのは授かりものなんだと思ってます。天が授けて下さるものなんだ

と、人の手では、どうにもできないことなんだと思ってきました。そういうものだと、それが正しいんだと思ってきました、だけど、あなたは——私たちは、自分たちの勝手で、天が授けてくれるはずの仕事を代わりにやろうとしてるような気がするんです。そんなことをしてはいけませんが——

久作 いいですか？ 排卵日というのは自然の摂理なんです。私はそれを確かめようとしてるだけです。自然に逆らったり手を加えたり、そういうことじゃないんです。

とめ でも、でも、私たちの心一つで、子供ができたりできなかったりするがですよ、そうですね。

そうですね。

久作 (遮って) そうなれば、望んだ時に子供を持つことができるかもしれないんです。

現におハナさんは、ようやく望んでいた子供ができて喜んでくれています。

とめ ——それは良いことかもしれないんですが——ですが——例えば、おキヨさんは——

久作 そうです。おキヨさんは、子供を望んではいかなかった。望まない子を身ごもる不幸をなくすことができるかもしれない。

とめ ——でも——でも、おキヨさんは——授かりものだからって、それを受け止めて、

授かりものだからって、自分が死ぬことだって受け止めてたと思うがです。それは、授かりものだからで——

久作

とめ

——私は怖いです——そんなことが自由になるのは怖いです。自分の勝手に身ごもってしまった子に——もしも不幸が起こったら——それは、私の身勝手のせいじゃないかって——私は、それを受け止めきれない気がするがです——

久作

とめ

——あなたはそうは思われねえがですか。

間。

とめ

あなたは研究のために子供をつくるがですか。

久作

——え？

とめ

——仰って下さらなければ良^いかったです。いつそ何も仰って下さらなければ、もし、身ごもったとしても、その子は授かりものでした。あなたには、研究を実証するための子でも——私には、授かりものだったのに——

とめ、出て行く。

久作　ちよっと待って下さい!!

とめは戻って来ない。

久作は一人残る。

久作

久作、論文の草稿に無理矢理取りかかろうとする。
しかし、何を書いていいのか判らない。
原稿を投げ出してしまふ久作。

久作

と、そこへより子が入ってくる。

より子　荻野先生!

より子を追って半三郎も入って来る。

半三郎 津島さん、荻野先生は今、あなたのそんな話につきあっている暇はないんですよ！

より子 そんな話ですって？！

久作 一体、どうしたんですか？

より子 今、古井先生ともお話ししていたんですけど、先程の患者さんのことです。

久作 おハナさんのことですか？

より子 いいえ、その前の患者さんです。

半三郎 —— 墮胎 —— を希望されていた ——

より子 先生、なぜ彼女の希望を拒否されたんですか。

久作 拒否したわけではありません。もう一度、よく考えて下さいと提案したまです。

彼女は結婚しているし、健康体です。経済的にも問題はないようでした。墮胎の理由がないんです。

より子 彼女はご主人の横暴に耐えかねてると言っていました。離縁する決心をしているんです。自由になりたいんです。

半三郎 墮胎の上に離縁だなんて、許しがたいことです。先生のご判断は正しかったと、僕は津島さんに言ったんです。それなのに ——

より子 だけど、そのために彼女自身や生まれてくる子の人生が不幸になるのだとした

ら——

半三郎 産婦人科の仕事は人がこの世に生まれ出る手助けをすることなんです！ 先生はその使命を全うされようとしてる方なんです！

より子 古井先生は男性ですから、そんなきれいごとを言っていていられるんです。自分の身を起こることはないから、その重荷を婦人に押しつけて、命を救うのが仕事だなんて偽善者もいいところですよ！

半三郎 偽善者?! 僕が偽善者ならあなたはなんです?! 婦人解放だかなんだか知りませんが、僕が偽善者なら、あなたはそのわがまま者です!!

より子 私は古井先生とお話をしたいのでありませんの。荻野先生、先生はどう思われるんです？

久作 ——どうって——

より子 望んだ時に子供を持ち、望まない時には子供を持たない。それは婦人の権利です。そうではありませんか。

久作 ——私には、墮胎できる技術があります。墮胎した方がいい場合とそうでない場合があるでしょう。しかし、私個人としては、基本的には——

より子 ——おキヨさんは——おキヨさんは、墮胎を希望されました。先生がそうして差し上げていれば——

半三郎 先生は正しかったんです。おキヨさんだって、そう思っていた筈です。神様が、お

キヨさんをお側に召されただけで——先生は——

（半三郎を無視して久作に）墮胎をしなければならぬ事情のある女性だっているんです。望まない子を持ってしまった女性が、そして、望まないで生まれて来てしまった子供たちが、それからどんな人生を送らなくてはならないか、先生はお考えになったことがあるんですか。

半三郎

望まないだとか、望まれないだとか言うのは、人間が浅はかだからです。全ての子供は神様からの授かりものです、全ては神の思し召しなんです。

久作

——神の思し召し——

半三郎

そうです。

より子

先生の研究は何のためなんですか。子供を持つことを自由に選べるようにするためではないんですか。そんな不幸な女性たちと、そして不幸になるかもしれない子供たちを救うためではないんですか。

久作

——私には判りません——一体、何のためなのか。

問。

より子

——先生には失望しました。

半三郎、久作に助け船を出そうと必死になる。

半三郎

先生、気になさることはないんです。先生は、女性たちを救うために診療と研究を続けていらっしゃる。そのことは、神様と僕が良く知っています。もう少しで研究ができ上がるんです。余計なことは考えずに、とにかく完成させることだけを考えて下さい。そのためでしたら、僕はどんなことでもします。この僕が誰にも邪魔はさせません！

間。

久作

——出ていってくれませんか。

半三郎

——え？

久作

私は、君たちの理想を実現するために研究をしているんじゃないんです。古井くんも、自分の理想があるなら、自分で実現したらいいでしょう。自分のすべきことから逃げて、私に理想や期待を押しつけるのは、いい加減に止めにして下さい。

半三郎

——先生——

久作

出ていって下さい。二人とも出ていって下さい。

半三郎

——

どうしようもない間。

半三郎、呆然と、その場を去っていく。

より子は出ていかない。

久作

津島さん。

より子

より子は出ていかない。まだ久作に話したいことがある。

間。

庭に続く扉から、突然、高見が入ってくる。

高見

よお、荻野。

久作

——何の用だ？

高見

奥さんが弁当届けに来てただろう。愛妻弁当を味見させて貰おうと思っ

久作

ここにあるから食ってくれ。俺は食べたくない。

高見

どうしたんだ。もうすぐ完成を見る論文のことで胸が一杯で食えないのか？

久作

高見 まあ頑張ってくれ。こっちは文字通り高みの見物だ（一人で笑う）

高見、より子がいるのに気づく。

高見 あら、よりちゃん、いたんだ。よりちゃんがいるのに気がつかないなんてどうか

してるな、俺。

より子

高見 どうしたの？ よりちゃんまでご機嫌斜め？ 仕事のし過ぎじゃないの？ そうい

う時にはね、俺と二人でうまいもんでも食いに行つて、ぱーっとうさ晴らしすれば
いいと思うんだけどな。

より子

（二人の間の緊張した雰囲気気づいて）席を外していきましょうか。

二人

——はい。

高見

高見「これ、貰っていくよ」と弁当を持って待合室へ出ていく。
間。

より子

——私の母の話です。母は、若い頃、ある男性と恋に落ちました。ありきたりな話ですが、その人は貧しい画家でした。母の家は古い家柄で、結婚に反対されて、母は家を飛び出し——そして、二人で暮らしはじめてすぐに、母は私を身ごもりました。そのために、父は絵の道を諦めて働きはじめました。だけど、やはり父は絵を諦めることができませんでした。私が生まれる少し前に、父は突然姿を消したそうです。母はたった一人で私を産み、私を連れて家に戻りました。そして、いつまでも——今でも、父が戻ってくるのを待っています。母は、私を可愛がってくれました。でも、ある時、母はこう言いました。「もし、あの時、お前ができていなかったらねえ」

私は、母を不幸だと思いました。子供を持つことを自由に選べるようになれば、私たちはもつと幸せになれると思うんです。

久作

より子

先生のなさっていることはそのためなのではありませんか？

久作

より子

そうではないんですか？ 先生——

久作

より子

——失礼します。

より子、出ていく。

待合室の高見、それに気づいて、弁当を持ったまま嬉しそうに立ち上がる。

高見
あら、よりちゃん、もうお話終わったの？

より子

より子、高見を見る。

高見が初めてみるより子がいる。

より子、泣いてしまう。

高見
よりちゃん——？

より子、うつむいて泣き続けている。

高見、より子に近寄る。

走り去るより子。

高見、それを見送る。

そして、診察室の扉を開ける。

一人、座り込んでいる久作がいる。

明るかった夏の空はいつのまにか曇っている。

遠くで雷の音。

そして、にわか雨。

暗転。

暗転中、久作が日記を読む声が聞こえる。

久作（声）

「八月十日。晴れて、甚だ暑し、入道雲立つ。昨夜もやはり寝つかれず。

八月十三日。久子、このところ、夜泣き激し。夏風邪を引いたらし。とめの不注意と義母の叱責。その騒ぎの間、余は終始無言なり。論文も何もせぬのに、疲れることおびただし。

八月二十八日。夕立あり。稲妻、雷鳴に驚いて久子大泣きす。酒を少々飲む。思つたより酩酊す。何の為に日々を過ごすか。ただただ、無為な日々なり。

九月十日。余は、如何なる目的の為に医師になりや。如何なる目的の為に研究をせしや。如何なる目的の為に『婦人の排卵期』の謎を解かんと思ひしや。

九月十二日。軒先の吊忍がいつの間にか枯れている。水をやり忘れたらし。哀れなり。養母は朝から晩まで下らぬ小言づくめなり。何とか努めても、片端かたはしからぶち壊

され、不快限りなし」

第三場 秋

同じ年の秋。

虫の声。

診療もとうに終わった夜。

久作は、弁当を食べ終えたところ。

とめはお茶を入れ直している。

半三郎、帰り支度をして待合室に入ってきて、診察室の扉の前で立ち止まる。

そして、決心したように扉を開ける。

半三郎 —— お先に失礼します —— あの、先生、明日の午前中は大学の研究室の方に行こう

と思っっているのです、こちらには午後から参ります。

久作 判りました。お疲れ様でした。

とめ お疲れ様でした。

半三郎 失礼します。

半三郎、帰って行く。

ノートに向かっている久作。

とめ、お茶を出しながら、

とめ ———— あの、あなた ————

——— お帰りは、今日も遅くなりますよね。

久作 ———— そうですね。

——— 帰ります。

とめ

まだ二人の間のわだかまりはなくなっていないようである。

とめ、帰ろうとする。

が、一旦、立ち止まる。

何か言いかける。

が、やはり何も言わずに、立ち去る。

久作、無理にでも書き続けようとする。

久作

すなわち

——即、先行月経は排卵を支配せずして排卵は次回の月経を間接に支配す、故に排卵の時期は予定月経に対して求むるが合理的にして先行月経に対して求むるは不合理なり——しかし、しかしなあ——

と、ハナが庭に続く扉から、そつと入ってくる。妊娠五ヶ月くらい。

ハナ

——荻野先生。

久作

——ああ、おハナさん。どうしました？ どこか具合が悪いんですか？

ハナ

いえ、そうではないがです。今、一人でテキドに散歩してましたら、病院の前を通り掛かりまして、そしたらこちらに明かりがついているのが見えました。それで

——ああ、先生が、まだこちらにおいでなさるなあと思って、ちよつとご挨拶に参りました。

久作

そうですか、どうぞ。

ハナ

お仕事してらっしゃるがでしたら、失礼いたしますすけ。

久作

いえ、ちよつと休憩していた所です。

ハナ

そうですか。

久作

——どうですか、調子は。

ハナ

はい、具合の悪いところは、どこも——

久作 それは、良かった。

ハナ ——はい。

久作はハナのためにお茶を入れている。

ハナ、それに気づいて、慌てて、

ハナ 先生、あの、結構ですから。

久作 いいんですよ。

ハナ、お礼の会釈をして、久作の机の方を見て、

ハナ 先生、研究の方はどんなですか？

久作 ——そうですね——もしかすると、できあがらないかもしれないかもしれません。

ハナ なんですですか?! ——あ、私のような学のないもんが伺っても、判らねえですけども。

久作 ——簡単なことなんです——私は駄目な医者なんです。駄目な研究者なんです。だから、です。それだけのことなんです。

ハナ 先生はいい先生です。立派な学者様です。

久作 ——おハナさん、私はね、私の研究や医者という仕事が、女性たちを救うことにな

るのだと思ってきました——しかし、本当にそうなのか判らなくなってしまうんです——もしかしたら、私の研究や診療が、女性たちの人生を左右することがあるかもしれない。時には苦しめることになってしまうのかもしれない——だとしたら——

ハナ　　そんげなことはありません。先生は、私に子宝を授けて下さいました。先生は神様のようなお方です。

久作　　——天は神様になんかなくては、いけないんじゃないでしょうか、子宝は、人からの授かりものです、それなら、それはそのままにしておかなくてはいけないのかもしれない。でも授かりもののために、苦しむ人もいます。私は——

ハナ　　先生——

久作　　——私は、この研究がしたかった。是非とも完成させたいと思っていました。それがもうあと少しの所に来ているというのに——私は何のためにここまで来たのか判らなくなっているんです——

久作、お茶と椅子をハナにすすめる。
間。

ハナ　　先生——

久作 はい。

ハナ ——私は、赤ん坊が欲しかったがです——それで、ようやくと身ごもることができました。

久作 ——はい。

ハナ それなのに、私、つまらねえことで——赤ん坊なんていらねえと思ってしまったがです。

久作 (驚いて) 何があったんです？

ハナ 身ごもって、お父ちゃんもお義母さんも大層喜んでくれました。で、お義母さんが言ったがです。「おハナはようやくやった。赤ん坊ができて本当に良かったなあ」って。お父ちゃんも「そうだ、そうだ」って。

久作 褒められたんじゃないですか。

ハナ ——それから、お父ちゃんが「やっぱり赤ん坊が産めなきや女じゃねえもんな」って。そしたらお義母さんが「そうだ。そうだ」って。それで、私、やっぱり赤ん坊ができんけりゃあ、私は用なしなんだと思つたら、なんか腹が立ったっていうか——頭が煮え立ったっていうか。いっそ、この子が生まれんけりゃあいい——なんて。

久作 おハナさん。

ハナ ——それに、思うがです。もしも——もしも、この子が——五体満足な子でねかつたら、また、お義母さんに叱られるんじゃないやねえだろうか。そう思うとこの子を産む

久作

のが、怖くて——私、これじゃあいとお母さんになれねえような気がするがです。
——おハナさん（ハナのために何か話してあげられることがないかと必死に考える。思いつく。自信はないがとにかく話し始める）
私は中学の時に、荻野の家に養子にきました。学問がしたくて、でも、実家は農家で、しかも次男坊で、大学に行かせて貰える見込みはありませんでした。荻野の養子になれば大学に行かせて貰えたんです。

——私は、それ以来、殆ど自分の母に会っていませんが——私は、母のことが好きです。明るい人なんです。回りにいる人皆を明るくすることが出来る人なんです。大学を出た時、実家に帰って、母に卒業証書を見せました。母は額にその卒業証書をおしただいて、それから、満面の笑顔で「良かったねえ、久作さん」と言ってくれました。卒業した時、荻野の母に「これからは元手を掛けた分、返してもらわなけりゃあ」と言われ、正直私は気が滅入っていました。何のための学問だったんだと思わずにはいられませんでした。でも、その母の笑顔を見た時は、心から「ああ、学問をしてきて良かったんだな」と思えたんです。

ハナ

いいお母様ですね。

久作

いいお母様です。おハナさんは——私の母にちよつと似ています。だから、私は、おハナさんもきつといいお母さんになれると思うんです。

ハナ

——そうでしょうか。

久作 (真剣に) きつとそうです。

ハナ —— 私、九つの時に、お母ちゃんを亡くしました。

いいお母ちゃんでした。着物も縫ってくれたし、旨えご飯を作ってくれました。それから、お手玉を作ってくれました。お手玉の数え歌も教えてくれました。私、お母ちゃんみてえになりたかったがです。でも、お母ちゃんみてえになんでもできやしません。何も教われませんでしたから。でも、私、お手玉だけはできるがです。せめて、子供にお手玉をして歌を歌ってあげようって思ってたんですども——(静かに) 私、お母ちゃんになりたかったがです——

久作 —— おハナさん。もしかしたら、いつか、お腹にいる内に五体満足かどうか判る日がくるかもしれません。

ハナ 本当ですか？ あの、この子が生まれる前に判るようになるでしょうか。

久作 もっと先のことでしょう。

ハナ —— そうですか。

久作 だけど、おハナさん、お腹の中にいる内に五体満足か判った方がいいでしょうか。

ハナ え？

久作 もしも、五体満足じゃないと判ったとしたら、どうしますか？

ハナ どうしますって——

久作 その子はいらないですか？

ハナ あ——

久作 ——おハナさんは、子供が欲しいですか？ お父ちゃんのためでも、お義母さんのためでもなく、おハナさん自身は子供が欲しいですか？

ハナ （よく考えて）——欲しいです。この子に生まれて欲しいです。

久作 それなら私は、おハナさんが元気に赤ちゃんを産めるようにできるだけのことをします。私にはそれしかできません。

ハナ

久作 人というのはですね、おハナさん。生まれた時に五体満足でも、怪我をすることもあつた。病気になることもある。何が起るか判らないもんです。絶対に病気になるはず、怪我もしない子を産むなんて、無理な相談です。

ハナ （久作をしつかりと見つめて）——ありがとうございます。

と、そこへ、久作ときちんと話をしよう、とめが戻ってくる。
が、ハナがいるのに気づいて待合室で立ち止まる。

ハナ

先生は、いいお医者さんですども、お家ではきつといいお父様となんでしょうね。

久作

いいえ、駄目です。家にはちゃんと帰れないから、子供の寝顔しか見られません。いいお父さんにはほど遠いでしょう。

ハナ　いいえ、先生はいいお父さんだと思います、先生は、学のねえ私に難しいことを

色々教えて下さいました——コーゴーのことも、泳いでおられる方のことも、私の腹が痛くなつた時にコーゴーすると子宝が授かることも、いいお母様のことも——私、学がありませんども、凄く臍に落ちました。先生にお任せすれば大丈夫だと思ひました。そして本当に大丈夫でした。先生はまだなんも知らねえ子供たちに、沢山の話をしてあげられる、いいお父様なんだと思います。

久作　おハナさん——今度生まれて来る私の子供のことなんですけど——

ハナ　奥様、おめでたなんですか？

久作　いいえ、まだできていないんです。あと五人くらいできたらいいなあと思つているんです。——次の子の名前は考へてあるんです。男の子だったら、博、女の子だったら、博子というんです。

ハナ　へえ。

久作　論文が完成したら、博士号を貰えるはずなんです。その論文をその子に捧げるつもりでいるんです。で、博士号の博という字を取つたんです。

ハナ　そうですか。

久作　家内には内緒で、姓名判断をしましてね。医者のかせにそんな非科学的なことをするなんて、ちよつと恥ずかしいですからね。そしたら、いい名前だつて言われたんです。幸せになる名前だそうなんです。

ハナ 私もそう思います。そのお子さんはきっと幸せになられます。

久作 ———— ありがとうございます。

間。

ハナ ———— 私、そろそろ失礼いたしますいね。

久作 そうですか。じゃあ、その辺までお送りしましょう。

ハナ そんな勿体ねえです。

久作 いいんです。テキドに散歩でもしたかったところなんです。

ハナ はい。

二人、立ち上がる。

待合室のとめ、二人が入ってくるのかと思い、慌てて、椅子の陰に隠れる。

久作、庭に続く扉を開けながら、ハナを見つめて、

久作 ———— おハナさんのお父ちゃんは、きっとおハナさんのことが大好きなんでしょうね。

ハナ どうでしょうか。

久作 きつとそうなんだと思います。

二人、庭へ出ていく。

とめ、まだまだ隠れている。

と、廊下から待合室へ高見が入ってくる。

高見

荻野く、いるか？（隠れているとめに気づき、訝しげに）——奥さん？

とめ、慌てて取り繕って、

とめ

——荻野は、ちょっと席を外しているようなんです。

高見

後一步ですね。荻野の論文。

とめ

——もしかすると、でき上らないかもしれません。

高見

え？

とめ

私のせいで、です。

高見

どういうことですか。

とめ

私も早く論文ができ上がって欲しいと思っていますがです。ですけど——論文のために実証があるのだそうです——そして、そのために私に身ごもって欲しいのだと言いました。

高見 ——なるほど。で？

とめ 私は、そんなことは嫌だと言いました。怖いからです。私は、子供というのは、天からの授かりものだと思っていました。研究のために、人の勝手な都合のために、人を作ってしまったては、いけないんじゃないかと思うがです。でも——

間。

高見 確かに、彼の研究は子供を天からの授かりものでなくすことになってしまいかも

れません。しかし、荻野は大きな謎を解いた。それは偉大なことです。それは間違
いなく偉大なことです。

とめ ですが、私は——

高見 たとえ荻野がやらなくても、人はどんどん謎を解いていくでしょう。つまりは、科
学はどんどん進んでいく。それは素晴らしい必然です。但し、それには福音だけで
はない。もう一つの側面が出てくるでしょう。それも必然です。

とめ はい——

高見 今、子供は天からの授かりものではなくなり、これから、ますます授かりものとい
うことから遠ざかっていくでしょう。その時、女性たちは悩まなければならぬ。
今までは、自由に選ばないために女性たちは苦しんできました。これからは、選べ

るが故に悩まなくてはならないんです。それは苦しいかもしれないが、進化した悩みです。確実に一歩進んだ偉大な悩みです。あなたは選べるということをお悩むことになった世界で初めての女性なんです。

とめ 私、どうしたらいいがでしょう。

高見 自分なりの、自分を偽らない答えを見つけることです。荻野の発見した新しい事実にあなたなりの納得を見つけることです。

とめ 私なりの――

高見 それが、見つけられなければ、あなたがそれで幸せでなくなるのなら、断われればいいんです。進歩を確実に福音にしていくためには、その進歩で幸せになれるのかを、考えなくてはいけないのだと思います。

とめ

久作、庭から診察室に戻ってくる。

待合室から高見の声が聞こえてくるのに気づいて、そっと覗く。

高見、黙っていると目にやる。そしてまた話し始める。

高見

――僕が医者になったのは、父親が医者だったからです。しかも、貧乏医者だった。要領が悪かったんです。僕の方がもっと上手くやれると思った。それと、ちよつと

ばかり勉強ができた。

とめ
——はあ。

高見
実は、手っとり早い金儲けの秘策を思いついたんです。金持ちの手術をする時にですね、麻酔を掛ける前にこう訊くんです。「松、竹、梅、並の四通りの手術がありますか、どれにしますか？ 勿論、松が一番お値段が張ります」。当然、慌てて「松！」って言いますよね。でも、実は値段が違うだけ。中身は同じなんです。僕は開業したら、この方式でやろうと思ってるんです。

とめ
まあ。

とめ、ちよつと笑う。

高見
——荻野という男は、研究者です。紛れもない研究者です。彼には知りたいことがあった。知りたいということは、謎を解き発見するということとは、それは、どんなことであっても偉人であることに間違いはありません。

とめ
——そうでしょうか

高見
荻野は自分は何のために研究をしているのか判らないと言っていました。その答えは簡単なことです。荻野はまだ世界の誰も解いてない謎を解きたかっただけなのです。純粹にそれだけなんです。それが研究者つてものです。（久作に）荻野、俺はそう思

うんだよ。

久作、診察室から出てくる。

久作

あなた。

とめ

高見 荻野、君は研究者をやっていきたまえ。解きたい謎が、解かずにはいられないことが、俺にはない。しかし、君にはそれがある。

久作

俺はただ研究がしたかっただけなのかもしれない。だが、それでいいんだろうか――

高見

それでいいんじゃないか。それだからこそ、研究っていうのは、凄いものなんじゃないのか。

久作

――そうなのか。

高見

じゃあ、俺は失敬するよ。いつまでも、夫婦の会話の邪魔をしても、面白くもならない。

高見、出ていく。

とめ、高見にお辞儀をして見送る。

とめ あなた――

久作 はい。

とめ その――子供のことなんですけど――

久作 ――はい。

とめ ――私、もっと沢山子供が欲しいと思っていますが。だから――子供を産もうと
思うがです。

久作 とめ――

とめ ――それで、私はきつと幸せになれると思うがです。だから子供を産みたいと思
うがです。

久作 ――ありがとう――ありがとう！

とめ ――それに、いい名前だと思うがです。あなたが考えて下さった子供の名前――

久作 ――え？

とめ したら、今度はいつつけ印があればいいんですか？

久作 それは――

久作、慌てて診察室に飛び込んで、とめのカレンダーを出して調べる。

久作 ——それは、今夜です！

とめ 今夜ですか？

久作 確実に間違いなく今夜なんですよ！ こうしてはいられません。すぐに帰りましょ
う！ 何せ今夜は記念すべきへげ印なんですから！

とめ はい。

二人、一緒に出ていく。

暗転。

暗転中、久作が日記を読む声が聞こえている。

久作（声）

「十一月二十八日。論文の本文執筆に取りかかる。黄体の観察症例、五十三例。受胎についての症例三例。ついで、とめの妊娠が成れば、排卵の時期の特定には、十分なり。彼女の懐妊が待たれる。論文の完成は年明け早々か。

十二月三十日。とめの懐妊、確定せり。余の仮説の正しきこと、証明さる。本格的に論文の執筆に没頭。年賀状の手配はとめに任せる。とめ、悪阻で気の毒な様子。一月五日。ついに、論文は結論の章に至る——

『結論。排卵の時期は、予定月経前第十二日乃至第十六日の五日間なり。換言すれ

ば卵子が受精せざる場合に於いては排卵後十三日乃至第十七日目に於て月経は来潮すべし。

この時期は月経周期の長短によりて移動することなし。

排卵の時期を先行月経に対して求むるは不合理なり、従来文献に於ける矛盾は斯^かくの如き不合理なる考察の結緊に帰する所多し——」

論文はフェードアウトしていく。

久作（声）

「——ここに我が論文脱稿す」

第四場 冬

年が明けて、二月頃。

雪が降っている。

外は一面の銀世界。

診療の終わった夕方。

診察室では久作がカルテに何か書き込んでいる。

身支度を整えたとめ、治療室から出てくる。

とめ、妊娠五ヶ月くらいのお腹をしている。

久作 順調ですよ。

とめ 男の子ですか？

久作 それは、さすがにまだ判りませんよ。

とめ まあ、どっちでもいいですけど。

久作 もう安定期に入りましたから、夫婦生活は普通にあっても構いませんよ。（いつも

の癖で患者さんに言うように言ってしまう）

とめ —— そんげなこと、あなた、ここで言わなくても ——

久作 あ、ああ、それはそうだった。

半三郎とより子、雑誌（『日本婦人科学会雑誌』）を持って入ってくる。

二人とも白衣は着ていない。

半三郎 先生！ 来ました、来ました！

久作 どうしたんです？

半三郎 あ、奥様、いらしてたんですか。

とめ どうも。

半三郎 どうですか、「ヒロちゃん」は。

とめ 順調みたいです。

久作 それで、誰が来たんですか。

より子 先生の論文です。先生の論文が載ってるんです！

久作 そうですか！

一同、雑誌を覗き込む。

半三郎

「排卵の時期、黄体と子宮粘膜の周期的変化との関係、子宮粘膜の周期的変化の周期及び受胎日に就いて」荻野久作。凄いですね。

久作

凄いことなんかありませんよ。当たり前の事実を当たり前に記しただけです。

半三郎

「従来の文献に於て少くとも本邦及び独塊どくおに於ける業績に於ては何れも先行月経を標準として各人各様の結論に到達し紛々として帰する所なく未だ何人も予定月経を標準として排卵の時期を研究せしものなきは寧ろ余の不可思議とする所なりと云わんのみ」なるほど。先生、これはドイツ医学界への挑戦状というわけですね。

久作

謙虚じゃなかったですか。

半三郎

そんなことありませんよ。奴らに思い知らせてやればいいんです。日本男児の心意気ここにあります。

より子

知りませんでしたわ。古井先生って国粹主義者でしたのね。

半三郎

思想は臨機応変に、信仰は生涯一路です。——先生、本当におめでとうございます。ありがとうございます。これで、博士号が取ればいいんですが。

半三郎

取れますよ。私だったら差し上げます。

より子

先生、私もこれは大変な発見だと思います。ただ科学的な快挙というだけでなく、これで多くの女性が救われることになると思います。

久作

多産で生活に困っている女性には、これを応用すれば、避妊ができるかもしれない不妊で悩んでいる女性も、受胎しやすくなります。理論的にはですが。

半三郎

先生、僕は思うんです。神は生命を人の手で奪うことをお許しになっていません。ですから、墮胎は罪です。けれど、この理論を応用して避妊をすることは神もお許しになると思うんです。命を奪うことにはなりませんから。

久作

なるほど。

半三郎

——先生、お話ししなければと思っていたんですが。

久作

何ですか？

半三郎

僕はドイツに留学しようと考えているんです。

久作

ほう、ドイツですか。それは羨ましい限りです。

半三郎

向こうに行ったら、精進を重ね、先生のこの論文以上の論文を書き上げてみせます。

久作

テーマは決めてあるんですか？

半三郎

本当は「聖母マリアの受胎を科学的に証明する」というのをやりたいんですが、それは無理でしょうから、「結核菌の生殖に与える影響」を研究します——教授に頂いたテーマですが、それも興味深く、また有益だと考えたくんです。

久作

是非とも頑張ってください。

そこへ、高見やって来る。

高見も白衣ではない。

手にはやはり久作の雑誌を持っている。

高見 荻野、読んだぞ。

久作 そうか。文句や批判があるなら、遠慮なく言ってくれ。

高見 遠慮なく文句を言うが。

久作 ああ。

高見 診療の仕事をしながら、これだけの論文を書いているというのは、実にけしからん。俺が考えるに、荻野には実は双子の弟がいて、二人で交代で病院に來ているとしか考えられない。が、そんなことを言っていると、荻野に嫉妬していると思われる。と悔しいので潔く言おう。脱帽だ。

久作 ありがとう。

高見 そして、潔くもう一言だけ言わせて貰おう。この発見は世界の医学界を震撼せしめるものだ。日本人だけに読ませるのは勿体ない。ドイツ語に書き直して、ドイツの産婦人科学会誌に投稿したまえ。

久作 ご忠告、有り難く受け取ろう。

高見 これだけの論文を書いたんだ。これからは研究だけに打ち込めるだろう。研究室の方も、放っておくまい。

久作 高見、私はこれからも研究者と医者わらじの二足の草鞋わらじでいこうと思う。

高見 それは、またなぜだ？

久作

研究はしたい。が、その研究で見いだしたことを、実際の現場で、どう活用しているか、その実践も、自分自身の手で責任を持っていきたい。そのどちらともをしなければ、自分の進んでいく先を見誤るような気がするんだ。

高見

相も変わらず現実離れしたことを言う奴だ。君が医師をやめたら、俺がその隙に腕を磨いて、荻野以上の臨床医と呼ばれて見せる目論見だったのにな。じゃあ、俺も研究でもして荻野以上の論文をモノにするしかないか。

より子

その方がよっぽど現実離れしてますわね。

高見

その時は、よりちゃんに手伝って貰わないと。

より子

私が、何をするんですの？

高見

荻野の論文のここを読んで下さいよ。「本例に於ては毎月排卵の時期に先つこと六日乃至八日に於て媾合の行われたること五ヶ月に及べるも更に受胎することなく、最後に排卵の時期の前日に行われたる媾合によりて受胎せる例なり——」、これを読み、呆れることしきりだ。自分の夫婦生活を論文に堂々と記すとは正にこれこそ脱帽ものだ。だから、俺が論文を書く暁にも、協力してくれる女性が是非とも必要なわけだ。そして、それは是非ともよりちゃんであって欲しい。

より子

高見先生、外科なら女性である必要はないんじゃないやありませんか。

高見

しまつた。

より子

私をたぶらかすおつもりなら、もうちょっと上等な作戦にして頂きたいですわ。

高見

は。い。

半三郎

なんてことだ。津島さんが高見先生に軽口を叩くなんて、あつてはならないことです。

高見

古井くん、君もにぶいね。

古井

——は？

高見

じゃあ、祝杯でもあげにいきましょうか。

半三郎

——そうですね。是非行きましょう。荻野先生。

高見

古井くん、君は気も利かない。奥さんの協力なくしてはできなかった、夫婦生活暴

露論文の完成祝いだよ。荻野夫妻は二人きりにしてあげたらどうなんだ？

半三郎

じゃあ、高見先生、誰が祝杯をあげにいくんです？

高見

俺とよりちゃんと、しかたがないから古井くんの三人だよ。

半三郎

それでは、僕は、何だか祝杯という気持ちにはなれません。

高見

いいからいいから。

より子

(久作ととめに) それでは、失礼いたします。

より子たちが出ていこうとするので、半三郎も一礼して、慌てて二人のあとを追う。

久作 (とめに) じゃあ、お言葉に甘えて二人で祝杯をあげるとしましうか。

とめ はい。

久作 —— ついでに、お祝いのぺけ印——というのはどうです？

とめ え？

久作 いや、嫌ならいいんです——

とめ い、いえ——

その時、廊下の方からわめきちらす男の声。

男 荻野せんせーい！ 荻野先生はどこですかのおー！！

久作 ？

男 産婦人科はどこですかー。

久作 ここです！

久作、扉を開ける。

男、飛び込んで来る。

臨月のハナを連れている。

男はハナの夫の佐吉である。

高見たち三人も戻ってくる。

久作 どうしました？

佐吉 おハナが、おハナが——う、生まれるんですいね！

久作 陣痛ですか？

ハナ あの、ちよつと痛うなただけなのに、まだ、大丈夫だつていうがに、お父^とちゃんが——

佐吉 大丈夫なこたねえですよ、先生。これだけ、腹がでっこくなつて、痛えつて言うたら、それは生まれるに決まっていますよのう！

久作 そうですね。陣痛が始まっても、おかしくないですね。

佐吉 ほれ、おらの言うた通りだ！

より子 じゃあ、あちらへ（治療室を指す）

佐吉 先生！ 宜しくお願ひします！

半三郎、「こんな男がおハナさんの旦那さんなのか」と男に気を取られていて、より子にどやされる。

より子 古井先生、ぼやぼやしないでください！

半三郎 はい。

佐吉 先生！ 先生！ 俺は何をしましょう。なんでも言いつけてくんなせえ！

久作 おとなしく、待っていて下さい。

佐吉 へえ。

ハナ、連れて行かれかけて、

ハナ あ、それから、先生、家でお義母かさんがへつついの脇で腰を抜かしてしまっていて、助けてあげてくんなせえ。

佐吉 あんなババアはほっときゃあいいがです。這って歩いたって大事ねえです。それより今はおハナです。

久作 腰を抜かしたなら、外科の方です。

高見 仕方ない。ババアは俺に任せとけ。(佐吉に) さあ、案内したまえ。

佐吉 だども先生、おらはおハナと一緒に——(いたいんです)

高見 君はここでは役立たずだ。

佐吉 (悲しい気持ち) へえ。

高見、さっさと出ていこうとする。

が、佐吉はおハナのことの心配である。

佐吉

おハナ、頑張れ〜！ 先生！ 痛いとうしねえでやってくんなせえ！ おハナ、すぐ戻って来るからなあ〜！

ハナ、判ったと合図をする。

より子、半三郎、ハナを促して治療室へ入っていく。

高見、佐吉を廊下に押し出す。

久作ととめ、二人になる。

久作

(小声で)と、いうことなので、ペけはもしかするとなしです。

とめ

判りました。

久作

すみません。

とめ

仕方ありません。産婦人科医の妻なんですから。

久作、治療室に入っていく。

久作を見ているとめ。

とめ、論文を捧げ持って深く頭をさげると、机の上に置く。
治療室の方を振り返るとめ。
ゆっくりと暗転していく。

幕